

あるキャンパー

Flak40 L61

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

朝霧高原のあるキャンプ場に思い入れがあり、脱サラしてまでやって来た男は人嫌いな意識がある上、大変人相の悪い隻眼の青年で名は“國守恭介”という。

いつの間にか自分のサイトとにやって来ていた、焚き火台忘れたと凍えているおまヌケな桃色髪の少女と出会う……

目次

新たな光

プロローグ

邂逅

日暮れ刻

同じ鍋

思い出と微睡み

うろの底

「外伝」在りし日の約束

軍馬で行こう

野宮準備「上」

野宮準備「下」

本栖湖の畔

100

86

75

64

54

41

28

17

8

1

一匹狼と五匹の仔犬達

火の傍

懐古

月光に包まれて

夜更かし

176

158

141

124

111

新たな光

プロローグ

地元を離れて二週間になり桜も見頃の時期になった。

俺はくにもりきようすけ國守恭介という、脱サラしたしがないキャンパーだ。

愛車は一トン積で六人乗りの商用トラック。そのエンジンが高トルクが売りの三リッターのインタークーラーターボディーゼル、そしてマニュアルのフルタイム四輪駆動車だ。

お陰でどこからどう見ても業者のトラックにしか見えないというのが玉に瑕だが、高性能な足をしているだけにどこ行っても困らずに良い旅を満喫している。

今日は静岡に来ているが目的地は、富士山西側の裾に広がる高原地帯、朝霧高原だ。その中でも、とある大会の会場横にあつたキャンプ場に向かう予定である。

大会とは「ジャンボリー」と言われるもので、ある国際的な組織の日本連盟が第十五回大会として十年前その地で行つたものを指す。

自分は未だ彼の組織の一粟であり、今は地元の隊の隊長を拝命している。そんなヤツの思い出巡りのキャンプという訳だ。

……と言っても、もう着いちまつてるが。

早速チエックインだが、他人と話すのはどうも苦手でならない。

というのも、元よりチベツトスナギツネの様な目付きで大変人相悪い上に、事故で左眼と左人差し指の第二関節から先を失っており。

義眼を付けると余計に人相悪い上に不気味感が増すという理由で眼帯をしてるが、どちらにしる致命的なレベルの人相の悪さという……

故にマル某として疑われたり、ガラの悪いのに絡まれたりする事にいい加減辟易してるところだ。

お陰でチエックインさえ通り抜ければ独りを楽しめるソロキャンプと言うのは、世間体というものを忘れる事が出来てとても良いのだ。

多少その容姿に驚いている様子だったが、難なくチエックイン出来た。

なので、車で自分が行きたいサイトに行つて荷物を下ろす。

ここからならば、富士山が良く見えて良い。

それに今日は平日だから一般客が少なくて大変好ましい状況だった。

適当に荷物を箱ごと下ろし車は適当に邪魔にならん端の方に停める。

これから設営するが、風向きに気を付けテントを張る。

というのもテントは化繊だ、幾ら難燃性と謳つてあつても所詮は化繊よく燃える。

故にテントの入り口は風下に向け、綿製で下で焚き火が可能なタープもテントの風下に建てるのだ。

……と言つても先ずはグラウンドシートを敷かねば始められぬ。

グラウンドシートはテントの下地の破れ防止及び防汚の為に敷く物だ。

正味、レジャーシート程度で十分。

だが、自分の使つてる二〜三人用のツリーリングドームテントは軽トラ用のシートが丁度良い大ききでそれを敷く。

そして、テントを建て……ずにまずコットを組み立てる。

コットとは折り畳み式のベッドだ。

何故先に組み立てるのかと言えば、コットの組み立ては力を要し、テント内で組み立てるのは無理な姿勢で行わなければならず、かと言つて地面で組み立てると土や泥が付着し、何の為にテントを底面を防汚したのか分からなくなってしまう。

故にさつさと組み立ててテント設営の時に邪魔にならん、乾いた所に放して、シユラフやマットを乗せておくのだ。

それが済むと漸くテントの設営を始める。

テントは吊り下げ式であるが、このテントは入り口にしない側にスリーブがあり、そこに黒色の骨を差し込み、対角側のペグで固定する耳の棒を骨の穴に挿して固定する。

それを骨が二本クロスする様にしたら、フックを掛けて吊り下げ自立させる。

それが済めば、フライシート用の灰色の骨をインナー入口側に取り付ける。

その上からフライシートを掛けて、四隅と灰色の骨を固定した所の耳のD環にフライシートのフックを掛ける。

そして、各骨にフライシートのマジックテープを止め、入り口反対側のインナー吊り下げフックの左右に黒い金属環で縁取られた穴（ハトメ）がありそこに小さい骨を挿してフライシートのマジックテープをそれに止めれば、テントは建つ。

後は適当に四隅にペグを打ち、入口側とその反対側のフライシートの固定用の環を地面にペグで打ち付ければ完成である。

そしたらその中に、最初に組み立てたコットと寝具一式を投げ込めばテントは終了である。

続いてタープを建てるが、タープを正確に建てるのは難しい。

というのも、タープは非自立式だからだ。

それに手持ちのタープは軍用の払い下げ品で、ポール等は付属せずポールやペグや紐は別途買った物で構成される。

そんな物をどうやって自立させるかと言えば、先ずは基準となるポールを組み立て、自立させるところから始まる。

紐をテント入口側のインナー両耳のペグに掛け、ポールが両方からのテンションにより支えられ斜めに自立する様にする。それにタープの中心のハトメに差し込み垂らす。

そして、その反対側の方のハトメにもポールを挿して張る位置に持つてき、垂直になる地面に物を置くなりして印を付けポールを基準となるポールの一直線上に倒す。

その先から直角に折れた所をポールと同じ長さになる地点を歩測してそこに一先ずペグを置き、ペグを地面に打ち付け紐を掛ける。

再びポールと紐を手にてタープを立てるとハトメから出た先端に紐を掛けテンションを掛ける。

そうすれば自立させるといふ第一関門がクリアとなる。

後は四隅を基準のポールより短いポールで四隅を二等辺三角形を作る意識で立てて行けばタープが完成する。

それが済めば。荷物をタープの下に移動させイスを組んで机を組み休憩する。

休憩を終え、網敷の焚き火台を組みその下に灰受けとして、トレーを敷く。

続いては薪割りだ。

……と言つても割る薪は少量だ。

理由は杉に火さえ付けば、割る前のを焚べそれから小檜や樫等の難燃性であるが、持続性のある火種に移行する。

故に少数で何ら問題ないのだ。

火種は何かと言えば、適当に刈った雑草や紙や松葉等があるが、今回は麻紐を解したのを使うつもりだ。

……御託はどうであれ薪割りを行う。

先ず地面に檜の薪を並べてそれを台とし、鋼の板の様な剣鉈を取り出して杉の薪を割る。

片刃の為、気を付けなければ左寄りに斜めに割れてしまうが慣れが全て解決する。

その秘訣は何かと訊かれる事がよくあるが、フィンランドの白い妖精宜しく「練習だ」と返す様になっている。

取り敢えず目標数程割れたが、まだ長い場合はどうするかと言えば、「そんな物は膝で割れば良い」とばかりに膝に打ち付けて押し折る。

折れなければ、剣鉈で真ん中に斜めに切れ込みを与えてやれば押し折る。

それでも駄目ならば、切れ込みを入れた方の反対側を剣鉈の峰で打って押し折る。

その様子は戦鬪狂ウオーモンガの様だと自分をよく知る人から言われ、知らぬ人が見た時はドン引きするだろうけど、この快感と作業効率の良さに勝るものはないとつくづく思う。

一仕事を終えると、コツヘルに米を二合弱目分量で入れ、それを片手に水場に行く。

まだ飯の時間まで三時間はあるが、米は暫く漬けとかないと焦げるのだ。

この水は富士の湧き水なのでさぞ美味だろう。

米を研ぎ、水を人差し指の第一関節程度いれ自陣に戻る。

それからは暫く放置して辺りの散策に出かけるつもりだ。

ジャンボリーにて開会式に大集会に閉会式を行ったアリーナが隣で更に向こうに分らが使っていたキャンパスサイトがあった。

いつかまた来ようと思つてたが、脱サラしなければ、再びこの地でジャンボリーが行われるまでなかつただろう。

そう思えるだけに、今この地に居る事を幸運だと思ふ。

邂逅

キャンプ場に入ってきた道を抜け、更に奥の方に向かう。

「こんにちは!!」

「……こんにちは」

道中やたら活きの良い桃色髪の娘が挨拶してきた事に、驚きながらも冷静に挨拶を返して改めて外を目指す。

思えば、赤の他人から挨拶されるのは久し振りだった気がする。

が、どうでもいい事として冷淡にも流す。

そんな決定を安々と下す己を冷笑したくなる。

その昔友人に「そんなんだからお前は友達ができんだ」と小言を貰った事がある。

その実態は新たな対人関係を築くのが恐ろしくて、その上それが億劫だからと逃げ回ってる様な、酷く利己的な”敗北主義者の”な思考回路をしている所にあるだろう。

勿論頭じゃ理解できているが、取っ掛かりがなければそうそうできないのが己の実態だ。

キャンプ場を抜けた所のT字路を左に曲がり、暫く道沿いに歩くと南側が開けた所に

出る。

それは大きな扇状に整地され中心に向かって斜面となつてゐる構造をしている。

それは正に露天の劇場である。

ここが何かと言えばジャンボリーにて開会式と中日の大集会と閉会式を行つた会場だつた。

あの時は約三万ものスカウトが集いギツシリ埋まつていた光景を思い出す。

中日と閉会式には催し物があり、特にフラッグダンスが強く記憶に焼け付いている。

人の背丈程の高さの色とりどりの旗を手にした数十名のスカウトが一糸乱れぬ動作で演技する光景は壯観なもので、正確無比なその所作には無駄がなく圧倒的であつた。

人間の動きの完成度に釘付けにされるといふ経験は初めてだつた。

それからアリーナをぐるりと回つて更に東の奥へと進み、管理棟の様な建物の横を抜け小道を南に進路を取る。

東の林の方に記憶のある、牧草地に抜ける小道を見つける。

この小道と言へば大会当時、殆ど霧の中で地盤が緩いものだから万単位で人が歩けば容易に泥濘みその苦肉の策として敷かれた藁が、自身の持つ納豆菌によつて発酵し、とんでもない悪臭を放つていた。

その臭いがフラッシュバックしイマジナリーな臭いに若干吐き気を覚える。

道を登ると高原の牧草地の手前まで道が通じており。

そこから先はチェーンで遮られている。

その向こうは何もない平原が広がっていた。

ここから続く当時の泥濘んだ道は跡形も無い。

当時夕暮れ時になると連日スコットランドのキルトを履いたスカウトが、バグパイプを演奏しながら歩いていた光景を思い出す。

あの曲の名前は知らないが、あの曲が流れるとノスタルジーな夕暮れを連想してしまう。

所謂条件反射というやつだろう。

自分ら日本人には非日常な光景だ。

故に、その経験は忘れることはないのだ。

夏場のここは気温こそ低くて涼しい所だが、常に湿度が十割を示し霧の中に紛れて富士山すら満足に拝めた記憶に乏しい。

が、ある日の朝方数分だけ晴れて富士山を拝める事があった。

低山しか無い海辺の地域で育った人間のせいかな高山……そして、最高峰の富士を拝めるという経験は非常に幻想的で貴重だったと思う。

時計をふと見ると既に五時を指そうとしている。

そろそろ火を熾して飯の時間だ、と踵を返した。

己のサイトに帰り着くと自分が出る頃には無かった黄色いテントが近くに立っていた。

どうやら他人が近くに来た様だ。

まあ、極力関わらないという己の方針に変わりはない。

それに、どういう者が監視しておかねば酷い目に遭うからというものもある。

左眼を失った時の事、居眠りしていた己の落ち度というものがあるが、目を覚ますと病院のベツトの上だったという事があった。

目撃者によれば俺の隣にやってきていた親子の糞餓鬼が、俺のガス缶を火に放り込んだという。

それが数秒後破裂して飛散した破片が左眼を貫通し失明したのだ。

親共々飛んだ下衆野郎だったが、既に刑事民事共に決着が付き社会的にも抹殺する事に成功しているのでこれ以上言うことはない。

己の身を護るには己で護る他ない。

それはさて置き、自陣のイスに腰掛け火を熾すことにする。

火種としてもみ崩した麻紐を二組用意し、片方を焚き火台の中央に乗せる。

その周りに割り箸台に細かく割いた杉の薪を並べてから、メタルマッチ（百八十度程度の熱で自然発火し三千度で燃焼するマグネシウムの特性を利用したもの）を劍鉈の峰に当て、素早くメタルマッチを引いて高温の火花を散らす。

すると火種の麻綿に着火する。

そしたら隙かさずもう片方の麻綿を被せ保温し、火吹き棒で弱めに空気を送る。

割り箸の様な細さの杉の薪に着火させ、より太いものに乗せてゆく。

ある程度火が大きくなれば呼吸作用の大きい網式なので空気を送る必要がなくなる。

故にそれなりの火になればさつさと樫の薪を並べ着火させる。

樫は燃えにくいのが、火が付けば備長炭迄とはいかないものの長く強く燃え、杉と比較して煙と火の粉が舞うのを抑えられる。

今まで目の前に集中して気が付かなかった視線を感じる。

隣のテントの方を見ると、ブランケットを纏いガスランタンで必死に暖を取ろうとしている娘と目が合った。

さつきアリーナの方に向かうときに殊勝にも、自分に元気よく挨拶してきた娘だ。

カタカタと震えて今にも泣き出しそうな表情をしている。

が、あくまで赤の他人だと無視しようと思つた矢先。

そんな態度してええんか？

スカウトの誓いと掟に反せんか？

という疑問が同時に噴出する。

助け舟を出すのが、大人でありスカウトの身である己の責任ではないかと。

一方、他人とは関われれば後で地獄を見るかも知れない。

という恐怖もある。

その場合は眼を見て相手の本質を探る。

それによれば純粹無垢な娘である気がする。

というのも、その青い目には我も意地の汚さも無く純粹無垢なものしか写らない。

それでも少々不安だが、印象最悪レベルの自分に臆せず挨拶してきた娘が悪童だとは到底思えない。

故に声を掛けるべきだろうと思える。

なんだかんだ人嫌いだと言っておきながら、お人好しなところがあるのは否定できない。

あと、先に思った様にスカウトの掟に反する真似は俺にはできないというのもあった。

三つの誓いの一つに「いつも他の人々を助けます」と言うのがある。

掟の一つにも「スカウトは親切である」とある。

それに俺らスカウトのスローガンは「日々の善行」とある様に善行を働く事が潔く
されるのだ。

スカウトとしての名誉を守る為にも。

「寒かろうに、こつちきいさんせ!!」

思った通り、数句「さんせ」という言葉に引つかかっていた様子だが、次の瞬間にはぱつと明るい表情になり、喜々としてガスランタンとイスをもつて来る。

標準語より方言が強い己の言葉が通じる様で若干安心する。

にしても、ランタンは意地でも手から離すつもりないらしい。

おもしろい娘だと、素直に思う。

少女はありがたそうに且つ恥ずかしそうに。

俺の領域である。タープの前に立ち止まると「いいんですか?」と控えめに尋ねる。

俺は「ええぞ。取り敢えずそこ座りんさんせ」と促す。

娘はなんの疑いもなく「ありがとうございます」と従う。

その様子からして、他人を疑い警戒するという事を知らないのだろうという仮説が立つが、別段どうしよう気がないので問題は無い。

が、若干この娘の行末を心配に思うのは気のせいだろうか?

「ええか？」と話を切り出す。

呼んだからには自分から話し掛けねば筋が通らん。

娘も「何でしょうか？」と元気よく答える。

明るい娘だと言う印象だ。

「単刀直入に訊くが、焚き火台忘れたんか？」

「友達から借りてたんですが、家に忘れてしまいました……えへへ」

「1500円で貸し出しあつたらうに……」

「え?! ホントですかっ!!」

「ホンマやぞ……てか知らなかったんか？」

「知りませんでしたっ!!」

「今からじゃもう遅い……ようそこらへん確認しいーさんせ」

「はい!!反省しておりまふ!!」

改めておもしろい娘だと感じる。

この娘を警戒するのも好い加減馬鹿らしく思えてきた。

と同時に、この娘は鉄と鋼を貼り合わせるホウ砂の様な素質の娘だろうという仮説が生まれ、珍しく他人に興味を覚える。

「そーいや、あんた名前は？」

「わたしですかっ?!」

いや、君しか居らんやろ。

気付けば俺も笑みを浮かべている。

つくづくおもしろい娘だ。

「私は各務原なでしこです!! よろしくおねがいします!!」

「僕は國守恭介。よろしゅうのう」

日暮れ刻

暗くなってきたので、ランタンを用意する。

このランタンは液体燃料を加压し、それを自身のマントル（光る部分）の放射熱によってジェネレータを通る燃料がガスとなり、それを噴射、燃焼させる仕組みだ。

因みに燃料は灯油である。

「ふおおおつ!! ランタンだ!!」

彼女は大喜びだ。

こんなに反応が良いと俺も嬉しく思う。

「儂の道具が気になるかね?」

「気になりすぎてワクワクです!!」

「そりゃええ」

このランタンはドイツの有名メーカー製で、その歴史は古く一次大戦中に開発された物だったりする。

当然このランタンはそんな骨董品ではなく、数年前に買った新品だ。

それはさて置きこのランタンには不名誉な渾名がある。

通称”じゃじゃ馬ランタン”だ。

……というのも一回使うと燃料噴射口の部品が緩み、それを知らずに点火しようものなら、溢れ出た燃料が黒煙上げて燃え火柱と化す。

無論移動中の振動でも緩むので要注意で。

自分も最初の頃何回かやらかして学習している。

が、アレを目にするとマジでビビる。

「おお……使う前に分解して、整備するんですねえ……」

「でないと火柱になるからのう」

「本当にそうなるんですか？」

「何回かやらかしてるからな」

「へえー、気を付けないとだめなんですね」

「火事にしたくなけりゃ”備えよ常に”じゃ」

「そなえよつねに……」

ケロシンランタンを点火するには、「プレヒート」という工程をしなければならぬ。
い。

プレヒートとは予熱という意味で、それが必要な理由は燃料の性質に依存する。

灯油はガソリンより遥かに高い温度で気化……ガス化するので引火点が高い。

ガソリンが氷点下四十度以下に対して、灯油は五十度という高い温度でやっと引火するレベルだ。

故に燃料の安さと安全性の面からすれば、ガソリンより遥かに優秀と言える。

「これが、プレヒートバーナーかあ……」

「まだ加圧しとらんから、まだなんにもならんど」

「そう言えば灯油って引火点高いつて言つてたじゃないですか？」

「ん？ 火が点かんと思つとるんか？」

「はい！ だつて五十度以上だつて……」

「まあ、そう思うじやろう」

「ですよねっ?!」

「ただ、例外があつて、霧状の灯油の引火性はガソリン並みになるぞ」

「そ、そうなんだ」

ポンプアダプタと自転車用の小型ポンプを繋いで空気を送る。

その際に燃料キャップを兼ねる圧力計やアダプタにバルブが開いてないか入れる前に確認する。

バルブを締め忘れても火柱が立つので要注意だ。

自転車用のポンプを使えば所用圧までの昇圧も、ものの数往復の数秒で終わる。

が、元々付いてるポンプでポンピングするとひたすらにつらい。

所用圧まで昇圧したのでいよいよプレヒートだ。

バーナーへの点火は噴射口を抑えているレバーを押し下げれば噴霧されるという至極単純な構造で、給気口にライター等の火を近づけたら吸引され、霧状の灯油に引火、燃焼が始まる仕組みだ。

「じゃあやるぞ」

「はい」

オイルライターをポケットから出して、蓋を開く。

すると「キンツ」と小気味いい金属音と共に開き、スターターをイグニッションすれば「ジュボツ」と芯に火が灯る。

「あつ、オイルライター!!」

レバーを若干開いて、給気口に火を吸わせる。

刹那、引火し「ゴボボボボー!!」という勇ましい燃焼音を轟かせる。

オイルライターは蓋を指で跳ねて「パチン」と閉めポケットに再び放り込む。

「これがプレヒートオ!! あ、写真撮っても良いですか?」

「別に構わんよ」

バーナーの空気の使用量は凄まじい。

三十秒程あれば入れた空気の半分以上は消費してしまう。その都度、ポンプで空気を送ってやらねばならない。

九十秒が経ち完全に予熱され。

隙かさず、バルブを開いてマントルに点火。

明りが灯ればバーナーはもう用無しだ。

「うひゃっ！ 眩しい……」

「五〇〇ワット相当だからな」

このランタンは五〇〇ワットクラスの光源だ。

故に相当な光量を発揮する。

普通はランタンスタンドに掛けるだろう。

しかし、俺はトライポッドに吊るす。

何故なら、ランタンスタンドよりトライポッドの方がバラした時に小型になるからだ。

当然ランタンを直視すると目が焼けるので、お互いの目に直接入らない所に移動させる。

「さて、飯の準備に掛かるが、各務原さんは何食べるつもりかね？」

「わたし、水炊き作ろうと思って……あ、一緒に食べませんか？」

「じゃあお呼ばれしようかのう」

「はい！ よろこんでー」

彼女はそう言うと、自分のテントの方へと走って行く。

俺はその間に折り畳みのテーブルと、袋の中から重ねたコッヘルと小型軽量で風に強いガスストーブを取り出し、コッヘルの中に入れておいた、容量一〇五グラムのOD缶と合体させ、バーナーには四本五徳を取り付ける。

コイツには何をさせるかと言えば炊飯だ。

炊飯は火力が要らないので、一〇五グラムもガスがあれば余裕で炊けるのだ。

おかずは何かと言えば、カットキャベツとモヤシに鶏のセセリを各一パック使かった、己でもよくわからん汁物だ。

味付けは出汁の素と塩と胡椒と醤油とシンプルな物で、至る素材や調味料を雑に入れて作る。

雑を極めた味だけ保証のできる汁だ。

おかずはケロシンストーブでやるのが、俺のやり方だ。

これはアメリカの有名メーカー製のガソリンも灯油も使えるデュアルフューエル仕様のストーブ。

しかし、ランタン共々灯油運用である。

このケロシンストーブにはプレヒート用バーナー等の気の利いた装備はない。ならどうするかと言えば、メタノールをバーナーの受け皿に投入しそれに着火。

燃料の通るジェネレーターを直接炙ってプレヒートする方式だ。

ただプレヒートにメタノールを使う関係上、その時にひっくり返したり漏洩させると延焼する危険性があるのは否定できない。

早速こつちもポンプアダプターにポンプを取り付けて加圧する。

しかし、構造的に圧力計かポンプアダプターかを選択するしかないのが勘が頼りだ。

大体、固くて入れ難くなったなと思うまで入れ、ポンプを取り外す。

そしたら本体をテーブルに置いたトレイの上に乗せ、メタノールを受け皿の八分目まで入れる。

そして、メタルマッチの火花で着火する。

「材料持つてきましたって……ふおおおつ、なんか新しいアイテムあるう!!」

「気になるかね?」

「気になりますっ!!」

やたらデカイ手提げ袋を置くと興奮気味に目を輝かせて駆け寄ってくる。

本当に純粹無垢な娘なんだと思う。

「これってコンロですか?」

「コンロって言ったたらコンロだが、ストーブと言うのが正じゃな」
「ストーブ……」

その様子的に人間を温める方のストーブを想像してる様だ。
普通はストーブと言えばそっちだからな。

「まあ、コイツは農のランタンと同じで、灯油を燃料としている」

「へえ……てことはプレヒートしないと使えないのかあ……ん？でも火がついてる？」
「今、エタノールでプレヒートしてるって……そろそろだな」

入れたエタノールが殆ど燃焼し、受け皿が乾いてくる。

「頭退けさんせ。 顔焼けるぞ」

「あ、はい!!」

彼女が顔を退けたのを確認し、コックを撚る。

その瞬間オレンジ色の火柱が一瞬立ち直ぐにガスコンロの様な青白く形の整った炎に取って代わられる。

「おわあっ!!」 び、びっくりした!!」

鳩が豆鉄砲喰らったような顔をした彼女のその顔が妙にツボに入った。

「がっはっはっはっはっ!!」 ゲホッゲホッ!!」

笑う事が久しぶりだったので咽る。

「もお、ヒドイですよお!!」

「すまん、すまん」

二人の笑い声が静かで二人しか居ないサイトに飴した。

彼女は袋からローテーブルとカセットコンロと土鍋を展開するが……その土鍋が一般家庭にある様な物で、一人でやる分にはあまりに大きく、そして素材も大量に持ち込んでいる事に戦慄を覚える。

まさか一人でそれ程の量をこの娘は食うのか？

それとも、己の腹の容量を過大評価してるのか？

マトモなのは俺だけかと、ボートを用意されて洋上要塞から追い出されそうなセリフが脳裏に浮かぶ。

「……その量一人で食うつもりだったのか？」

「えへへ、これ位一人でペろりですよ!!」

「……………」

「へ？」

……この娘、某ピンクボールの化身か？

という感想が浮かぶが、口にはすまい。

「じゃあ、作っていきますねっ!!」
「おう」

斯くいう俺の方は、ガスストーブで中火に掛けてるのは米の入ったコツヘルで、そのフタはそのコツヘルよりも大きい別のメーカーのだ。

というのも、このコツヘルの元々のフタが閉まりが悪く、別メーカーのコツヘルのフタを載せた方が炊飯には最適という結論に至った結果を反映したものだからだ。

が、それだけだとオールチタン製でウルトラライトを謳ってる物だけに、余りに軽く吹き溢れで持ち上がってフタが落下してしまう。

なので上には使う予定のないスキレットを乗せて重りとしている。

あるもの何でも創意工夫して使いの精神で、大概なんともしてしまるのが俺らスカウトだと俺は思ってる。

よくわからん汁物の方もケロシンストーブの上に掛け

た一番大きい一リッターのコツヘルをケロシンストーブに乗せて、中火で茹でてゆく。

その際の茹で汁は水だったりペットボトルのお茶だったりと全く拘りがない。

何故ならば、食って美味けりゃ正だからだ。

キャベツに火が通って体積が小さくなったら、セセリを投入し更に火を掛ける。

それに火が通れば、モヤシと醤油を突っ込んで完成とするつもりだ。
我ながらに、いい加減なものだと思つづくと思う。

一方彼女の方は「出来てからのお楽しみなのでひみつですつ!!」だと言ひ。
材料もこつちから見えない様に作つてるのが、なんとも可愛らしく思う。
たまには、こんな事あつても良いもんだなど。

同じ鍋

炊飯中のコッヘルから粘り気のある水滴が滴り始める。

それは、中身が沸騰したという証左であり、弱火にせよという合図でもあるのだ。

ただ弱火にした後が勝負で、勘だけを頼りに焦げを作りながら炭化させぬ手前で炊き上げるといふ、絶妙さを求められるのが野外炊飯の醍醐味だ。

それが普通にできるといふのが飯炊きの誉れだ。

俺はそう思っている。

なぜなら、飯炊きの道は深く険しいものだとは知っているからだ。

ボーイスカウトに入りたての頃は、失敗しては隊長によく叱られた。

一年経った頃にはまともに炊ける様になり。

終いにはお陰で団内は元より県内でも、その技能では最高のスカウトとして名を馳せる名誉を得た。

今はもう指導者として教える方側になってしまい、極力子供らにやらせて手出しせぬ立場になってしまったが……

しかし、なんでも己でやりたくてたまらない人間には辛い。

指導者という立場が辛いものだと言った。

それで始めたのがソロキャンプだった。

安月給で仕事している頃に始めたものだから、己のテントやランタンにストーブ等のアイテムを揃えるのにかなり苦労した。

今手にしている道具は全てその時に手に入れた物だ。

今こそ、なんの苦労もせず一生遊んで暮らせる程の資産を手にしてるが、金の価値を知ってるだけに散財はしないと心に堅く誓っている。

何故ならば、成金主義は究極にダサく嫌いだからだ。

それに俺はスカウトである。

掟に”スカウトは質素である”とある様に、俺もそう生きていく。

それを辞める時はスカウトであること以前に人としての名誉を棄てる時だろう。

そう言えば目の前のこの娘は資金の調達をどうしてるのかわからない。

が、少し考えれば大体わかる。

暇なので考察してみよう。

焚き火台は”友達から借りる”と言った様に、何点かは借り物だろう。

既に見えている物では、あの大事そうにしているガスランタンと恐らくイスのみが彼女自身の財産で得られたアイテムなんじゃないかと考察する。

特にガスランタンの扱いを見ればよくわかる。

何よりも丁寧な扱っているから。

恐らくバイトか何かして、それで得た資金で初めて買ったものなのだろう。

俺もバイトすれば高校時代でも多少は彼女みたいにアイテム得られたんじゃないかと思うが、障壁がある。

バイトと言えば大半接客業だ。

故に人嫌いで、理屈の通らぬ事は絶対認めず、正義感の強い俺が客と揉めて追い出される未来しか描けずやらなかった。

その後高卒で社会人となり仕事している時にも、理不尽や不条理が抗う俺を何度も襲来し挫折しかけた。

あの時は地獄だった。

同調圧力も凄まじく、誰も今起きている異常に声を挙げなかったし、俺が言えば下つ端の言うことだからと容易に揉み消される。

あれは地獄だった。

余計に人が嫌いになり、宝くじ当たったその日に辞めてやった。

今思えばあの企業が異常だったのかもしれないが、それ以外は知らないのでなんとも言えない。

……それを思えば、この娘がバイトしているなら、凄いことだと純粹に思えるのだ。箸を聴診棒に米の入ったコツヘルの音を聞きながら、他に見るものもないので娘の方を見てゐるが。

本当に楽しそうに作っている様子が伺える。

俺の視線に気が付いてか、時より笑顔を覗かせ「うふふ、まだですよ」と戯けて言うので、「そうかい楽しみにしちよるけえな」と返す。

その他愛もないやり取りが、楽しい。

……他人と居て楽しいと思つたのは何年ぶりなのかもうわからない。

が、今日彼女と過ごすこの時間が究極に楽しいと言うのは紛れもない事実だ。

……そう言えば、鍋は「秘密です」と言つたものの、その少し前には「水炊き」つてハツキリ言つてた気がする。

それは本人が忘れてなのか、うっかりなのかわからない。

が、何も言うまいと心に誓つた。

暫くの後、炊飯中のコツヘル内の音が変わつたので、最後の仕上げに掛かる。

バーナーのコックを全開。

コツヘルの底全体に火が伝わるように動かすことものの数秒で火から下ろす。

すると、焦げの香ばしい香りが辺りに漂い食欲を誘う。

今日もいい具合に決まったとニヤリと口角を上げほくそ笑む。
米炊きのこの瞬間がたまらなく良いのだ。

米は終わったので、よくわからん汁の方の作業を進める。

こちらでもセセリに火が通つたので、最後の具材のモヤシを放り込む。
が、蓋がちやんと閉まらない。

が些細な問題でしかないので無理やり閉めて、さつきまで炊飯の蓋抑えとして従事していたスキレットを乗せる。

スキレットは重しとしても優秀なのだ。

ヨシと顔をあげたら、綺麗な水色の双眸と目が合った。

ワクワクに満ち溢れているそんな目でこちらを見つめている。

「きょうすけさん、できましたよー」

「ああ、モヤシに火が通つたらそつちに行く」

机を挟んで互いに向かい合う格好を取る。

二人で鍋をつつくなら常套だろう。

んで肝心の鍋だが、旨そうな水炊きに仕上がってる。

まだ、口に運んでないからわからんが、既にこの芳しい匂いだ。

絶対旨い。

それを食す権利を得る条件として、己の汁と飯半分を彼女に分ける。キラキラとした目で皿を用意して待っている。が、まるで待てを言い渡された犬っ子の様だ。

かわええ……

「ほら」

「ありがとうございます!!」

彼女は注がれた器を覗き込み。

「ふおおお!! おこげ!!」

「こっちは、せせりの汁!!」

「鶏さんづくしだ!!」

物や状況についての感嘆の声を一つ一つに挙げてゆく。

本当におもしろい娘だ。

大人になってもこのままであつてほしいとつくづく思う。

「いただきます!!」

元気に合唱した彼女は早速、俺のよくわからん汁を口に運ぶ。

先ずはモヤシから。

「んんん!! おいしいっ!!」

「そうかそうか」

旨いと言われりや俺も嬉しい。

彼女はキャベツ、セセリ、モヤシを箸で絡めて一餅にしたのをそのあんぐりと開けた大口に放り込む。

早速やりよつたと見守る。

「ふおれつ、ふえつほうほうおいしいふえふう!!」

口にももの入れたままryと説教臭い言葉が浮かぶが、せっかく楽しそうにしとーのに折るなーやという声が優勢なものと、単純にその様子がおもしろいのでそのままとする。

お次は、飯のようだ。

物珍し気に且つ興奮気味に煎餅状の焦げを観察した後、それを口に入れる。

「んんん!! おこげおいしい!!」

「そりやええ、飯炊き命理に尽きるのう」

「そう言えば、お米コツヘルで炊かれましたけど、難しいんですか?」

「まあ、慣れるまでちと掛かるが、コツさえ掴めば誰でもできる」

「後で教えてもらっても良いですか?」

「ええよ、教えちゃろう」

「ありがとうございます!!」

その後もほっちやつこほっちやつこ口に駆け込むように食べる娘の黄色い歓声を聞
き。

あつけにとられつつ、良いもんだなと見とれてた。

……が、気が付いてしまった。

あんまり悠長にしるとる余裕はない。

既に水炊きの半数を吸い込む様に食べている……

はよ食わねば、俺の分ねえと戦慄を覚え、既に空と化したよくわからん汁のコツヘル
に水炊きをよそい、手を合わせる。

「んじやつちも、いただきます」

早速エノキを口に入れる。

鳥出汁を吸いその上、コリコリ感があつて素晴らしい。

シメジは素材の香りそのままに出汁と合わさり絶妙な風味に、豆腐はしつとりとして
旨い。

で、鶏モモとミズナを絡めて口に運べば、鶏の感触もさることながら、ミズナのシャ
キシヤキ感やその風味も大変美味で、米を駆け込めば幸福感が絶頂を迎え爆発する。

”うますぎるツ!!とか”もつと食わせろツ!!という裸の蛇のセリフが脳裏をよぎり、こんなの反則やと思いいながらに、喋る為にリソースなんぞ割いてられねえと、黙々とガツガツ運ぶ。

そんな俺の様子を見てか、娘は満足気な笑顔でこちらを見ている。

これでも旨い飯はそうそうねえよと、深く味わっているのだ。

具材が少なくなつて汁がそれなりに残っている状態になる。

もう終わりかと、少し名残惜しさを感じる。

一方娘は食材持つて来たバッグをゴソゴソと漁っている。

なんやなんやと見ると、出てきたのは冷凍うどんだ。

ここぞうどん投入とはよくわかつてるなこの娘。

「……ようわかつてらっしやる」

「メ食べますか?」

「ゴチになります」

「やった!」

水炊きの汁に醤油を加え、煮立たせる。

そしてらうどんを投入して火が通るのを待つ。

暫くしてうどんと化した水炊きを啜る。

具材の出汁が絡んだ、コシのあるうどんがめちやくちや旨い。

関西圏の人間だから薄口のだし醤油になれてるのか、関東醤油での濃い味付けに新鮮味を感じる。

……にしても我ウドンスキー・ススロノフ（誰やそのロシア人）にはたまらんべだ。

「これぞ鍋の醍醐味つちゆうやつちやのう。 よーわこうとる」

「えへへ」

「わしゃ外でこねいにちゃんとした料理食ったの、初めてやったわ……ありがとうそして、ごちそうさまでした」

「お粗末さまでしたー」

楽しい飯の一時が終わりを告げ、腹いっぱいながらにまだ名残惜しさを禁じえない。

しかし鍋は綺麗に空っぽで。もう何も残ってない。

しかしながらによう食ったものと、互いにゆっくりしながら片付けに備える。

彼女はスマホをしきりに弄って、笑顔になったりしている。

友人とSNSで話をしているのだろう。

斯くいう俺は今何もすることがないので、そんな彼女のぐるぐる回る表情の変化を見て静かに楽しんでいる。

暫くすると彼女がすくつと立ち上がる。

「なんや片付け開始か?」と思って立ち上がろうとした。

「……が手で制され一言。」

「一緒に写ってもらっていいですかっ!」

「どうやら俺と一緒に写りたいらしい。」

「が、こんな成りの男とか?と疑問が生じる。」

「なんで濃と?」

「だめですか?」

「あからさまにしよんぼりする。」

「そんな眼で俺を見るな。」

「俺の成りが悪いのだと。」

「駄目と言う訳じゃあないが、こんな顔が酷いのが君と写るのは場違いな——」

「場違いじゃないですよ!! それにきょうすけさんのお顔はオオカミさんみたいに凛々しくてかっこいいんです!! だから一緒に写りたくて……」

力の籠もった青い目は泳ぐこと無く真っ直ぐ俺の眼を見ている。

嘘を言っていないのは明白であった。

「思えば、他人に”かっこいい”だなんて言われた事がない。」

「”怖い”といつも避けられる側の人間だから。」

それが今、格好いいと本心から言われた事で。

一千もの敵の中で、漸くたつた一人の味方を見つけた。

そんな感激を禁じ得なかった。

「……わかった、すまんな」

「自分を否定しちゃだめですよ、きょうすけさん」

「……」

まさかこんな若い子に説教貰うとは……

己が一番諦めとるのが、駄目だということか。

この娘には逆らえん、そんな気がする。

そう思ったもつかの間、彼女はすつと俺の右脇に立つと、右腕に抱き付き身を寄せる。

顔のすぐ右には彼女の顔が並んで、彼女の香りが鼻孔をくすぐる。

伸ばした彼女の右手のスマホには互いの顔が収まっている。

彼女は笑顔だ。

迷いのないそんな顔だ。

そんな彼女に降参だよよ思いながら、笑顔を作る。

「じゃあ、とりまーすー」

「おう」

「はいちーずー！」

「カシヤツ」

撮られた一葉には、屈託のない満面の笑みの少女と、優しげに微笑む隻眼の狼が写っていた。

二度と還らないその時間を写したこの画は、生涯の思い出の表紙となるような場面だ。

その写真は、まるで俺が孤独な一匹狼じゃないよと語ってる様だった。

思い出と微睡眠

宴の片付けを済ませ、その前に焚き火の角に置いて温めていた湯をお互いのカップに注いで一服する。

なでしこはココアで俺がブラックコーヒーだ。

勿論、ノンカフェインである。

流石に寝る前にカフェインを摂るような真似はしない。

「あつたまりますねい」

「じゃな」

彼女は完全に安心してか蕩けてしまっている。

そんなに無防備な有様でええんか？と思いつつも、まあいいかと思ってしまうのは、その振る舞いが余りに自然で、違和感がないせいかも知れない。

考えるだけ無駄だ無駄無駄と、コーヒーと共に胃に流し込む。

そうすれば、無駄な考えも酸に融解されるが如く消え失せるのだ。

「そう言えばきょうすけさんって普段何されてるんですか？」

「普段ねえ……」

先月までサラリーマンだったが、今は絶賛「他人」の奴隷から解き放たれ、体が朽ちるその時までの自由を手にした無職である。

やっつてることと言えば、月一でボーイスカウトのボーイ・ベンチャー隊の隊長として子供達を指導する指導者だ。

まあ、それが仕事と言えばそうなるかも知れないが、月の殆どは漂泊の旅人である。

この経験も子供達への指導に活かせりや万々歳という訳だ。

「わしゃ流浪の旅人じゃ」

「旅人なんですか?!」

「ちゆうても、今月入ってからじゃけどな」

「へえー、そう言えば独特の言葉遣いされてますけど近くの県の人だったり?」

「いいやのうた、もつと西方の人間だよ儂は」

「へえ……わたしといっしよで富士山目当てだったり?」

「まあ、そんなところじゃが……十年ばっかし昔ここに来たことがあつてな」

「え?! 十年前ですか?!」

彼女はクワツと食らいつく。

「そうじゃ。 わしゃここの近くの牧草地で、約三万もの人が集まり七日間にも及ぶキャンプをした」

「七日も?! それに三万人も?!」

それは第十五回日本スカウトジャンボリーの事である。

スカウトジャンボリーとは、ボーイスカウト日本連盟が四年に一度に行うボーイスカウトの祭典で、長期のキャンプ生活を伴いながら、各参加隊の班が国内或いは国外のスカウトと競い合ったり、遊んだりしながら交流を深めると言った事を行う。

尚、各種アクティビティへの参加は早いもの勝ちで、参加隊各個の野営能力や、哀しみを背負ったサイト配置によっては、参加できたりできなかつたりする。(絶対参加ものもあるけど)

だが、道端を彷徨っていても、コミユ力高い者を連れておけば、班長が少々コミユ障気味でも他県の人々或いは諸外国人と、お手軽に交流できたりして楽しい。

何故なら皆友好的で親切なスカウトだからだ。

故に何だかんだ言っても、血が違えどスカウト皆「兄弟」というのを体験できる、良い経験となるのだ。

因みに、朝霧高原では過去二度のジャンボリーが行われ一回は、世界スカウトジャンボリーであった。

「……それと、それぞれ別の場所になるが、一六回と一七回にも俺は参加したよ」

彼女は驚愕の表情だ。

ボーイスカウトの存在は世の中知らん人が多くなってしまうので無理もない。我々は何故か知名度が低いのだ。

「きよ、きようすけさんがそんなにベテランだったなんて!! きようしゆくです!!」

「そ、そんな大層なもんじゃないし、そねいにかしこまらんでええよ」

「はひいゝ!!」

彼女は感受性が高くてリアクションが一々おもしろい。

「んでな、気象条件や足元は中々にアレじゃったけど、ここで見た富士山やスコットランド隊の夕暮れ時のバグパイプの演奏がよう記憶に残つとる。それを鮮明に思い出せるだけでここに来た価値があるつちゆうもんよ」

「へえ、いいなあ」

「ああ、ありや本当に楽しかったぞ!!」

つつい声に力が入ってしまった。

それを見てか彼女は鈴を転がすように笑う。

「きようすけさんも興奮して声に力入るんですね」

「そんなこともあるようじゃな」

互いに呵々大笑だ。

暫くして彼女が思い出したかのように尋ねる。

「そう言えば、ぼーい……なんとかってなんですか？」

「ボーイスカウトか……」

ボーイスカウトは一九〇八年のイギリスにて、創始者たるロバート・ベーデン・パウエル卿が著した“スカウティング・フォア・ボーイズ”という本を元に子供達が始めた活動を源流とする。

それは数年でヨーロッパ各国からアメリカへと短期間に世界へと伝搬し広まった活動だ。

その内容は、野外に於ける青少年の育成について書かれたもので、その活動の中で子供達が自発的且つ自然的に野営技術だけでなく、リーダーシップや道徳心や自立心に独創性や機転の利かし方を学ぶことができる。

当然、誓いや掟と言う絶対的なルールが存在し、これらを守って活動して行く事となる。

一つ、仏仏教徒だから仏。神道やキリスト教等であれば神と置き換えられると国とに誠を尽くし掟を守ります。

一つ、いつも他の人々を助けます。

一つ、体を健やかに徳を養います。

この三つの誓いが大原則となる。

これはどの国も同じ誓いで、我々スカウトが三本指で敬礼するのもこれが根幹だからである。

俺もそんな滄海の一粟のスカウトとして誓いと掟を守り、活動を継続している。

俺の所では野外活動を主軸に学び、特にこの点に於いては他の団よりも学ぶ事ができるのが楽しかった。

……が、何を学んだか？と聞かれても、言うのが難しいのがボーイスカウトの活動で、学んだ技術は口にできててもその精神は口にするのは難しい。

何故ならば”行いう事により学ぶ”という活動故に、経験した者のみだけがそれを得る事ができるものだからだ。

それを一言で表せる言葉は「見て分かん者には、訊いても分かん」という言葉で、これはスカウトですら無かった爺様の口癖だった。

一見冷たい言葉に聞こえるだろう。

しかし、それこそが真理なのだと思うのだ。

「それに、俺らは特にどの団よりも装備がボロくてな……」

「ボロボロなんですか？」

「ああ、テントも穴だらけだな。朝目が覚めると顔中とか出てるところを何十箇所と

ヤブカにやられてたり、目の前をムカデが這ってたり、運が悪いとソイツに噛まれて目が醒めたり。酷い時は五人テントに六、七人を荷物ごと詰めて寝た上に全てを体験したりと、中々に無茶をさせられたよ」

「むりむりぜつたいむりだよそんなの!! わたしじゃ耐えられないよ!! それに三人用に三人でもキツイのにそれを超えてるのは流石に駄目だよ!!」

「ご尤もである。」

当時の我々が異常なのだ。

「まあ、そんな事をしとるのはその当時の”儂ら”だけじゃろうからな……お陰で儂の団の練度だけ、他の団とは比べ物にならない位高水準じゃった」

他にもウシガエル獲ったりヘビ捕まえたりして、”仲間”とゲラゲラ笑いながら捌いて焼いて食うとかと言う、所謂 ☆YA☆BA☆N☆ なサバイバルキャンプもそれなりにした。

……が、絶対引かれるのは目に見えているのでそれは言わない。

某”裸のヘビ”見たく”サバイバルビューアー”でもあれば直接描写せずに済むもんだが……（いや時々表示されるからアレも駄目だ）

まあ、どちらにせよキャンプは楽しむものだ。

過度に過酷な鍛錬にはしてはならない。

まあ、俺はそれでも楽しめるだろうけど。

「でもな、こうしてゆるくやるのも、わしゃ楽しいよ」

「ですよねっ!!」

彼女はやつと俺がこつち側の人間に戻って来た事に喜んでる様だ。

こんな幼気な娘に俺ら同等の過酷なキャンプなんて体験させられるか!!
幾ら俺とは言え常識的な思考回路は棄ててない。

「君みたいに華奢な子でも、一人でキャンプ出来る世の中というのはええもんじゃ」

「そんなー華奢だなんておおげさなー」

彼女は「華奢」と言われたのが余程嬉しかったのか、手をブンブン振り回して照れ隠しする。

そんな様子がかわいくて、いつまでも見てられそうだ。

確かに君は大飯食らいだ。

じゃけど俺からすりゃあ、十分華奢で可憐だ。

俺はそう思う。

「どうかそのままの君で居て貰いたいものだ」

彼女は微笑む。

俺みたいに、他人に絶望して目が濁って欲しくない

そう切に願うのだ。

彼女は手振り身振りで時には俺に写真を見せながら思い出を語る。

彼女は楽しそうだ。

特にキャンブへの馴れ初めの話で、本栖湖で行き倒れている時にであった”リン”という娘の話は特に弾む。

ただ、どの思い出も綺麗で、俺には眩しすぎる程光り輝く青春の一時でなのだ。

思えば学生時代にもっと親しくなった連中とも、もっと遊べばよかつたなあと思うのは、彼女がその時間を無駄にする事無く謳歌しているからに他ならないだろう。

そう思うと死んだ親友の事を思い出す俺は、随分と無駄な時間を過ごした様に思えて仕方がなかった。

今ヤツが生きてるならば、旅の道連れとして謳歌していた事だろう。
最早、二度と叶わぬ夢だが。

「君が過こすその時間は二度と還らない貴重な時間だ。じゃけえ大切にな」

「はいっ!!」

彼女は飛び切りの笑顔で肯定した。

俺はそんな彼女の幸福を祈る。

彼女こそ幸せ者として生きるべきだと。

冷たい空気が体を震わせる。

低く唸り身を起こし微睡んだ眼を擦る。

辺りは暗くなっていた。

気が付けば焚き火も燃え尽き、俺のランタンも燃料使い果たして消えてしまっている。
強い光源は無い。

しかし、彼女のガスランタンが生き残っている様で僅かな明かりがそこにはあった。

それを頼りに彼女を確認すると、ブランケットに包まって規則正しい寝息を立てている。
それに、どこまでも無防備なんだと嘆息し「ほら、風邪引くぞ」と頬を手の甲でペチ

ペチ叩く。

……やわらかい。

余りの柔らかさに引つ張ってみたくなる衝動に駆られそうになるが、理性ある者としてアウトだと自らを律する。

それでも、この娘は起きそうにない。

その有様に大きく嘆息する。

やるしかねえなど……

当然、やましい事ではない。

先ず、ヘッドライトを装備して独立した光源を確保する。

そして、彼女のテントのファスナーを開け、搬入通路を確保し流れる様の中に邪魔して、マットやシュラフが敷かれているのを確認する。

ヨシ。

シュラフのファスナーを開け彼女を包む用意をする。

が、カイロ等の暖房器具が近くに見えず。

彼女のザックをまさぐる訳にもいかん。

なので、仕方なし俺の白金カイロを持たせる事にする。

俺自身はまだ他にもなんぼでもやりようがあるので問題ないからだ。

テントから出て彼女を抱き抱える。

……思った以上に軽い事に驚き、ふわりと香った甘くなんとも言えない匂いによって思考が流されかける。

なんだ今のは?!と若干狼狽えながら彼女を運ぶ。

そして、彼女を入り口のすぐ向こうに一旦置き靴を脱いで入る。

次に行う事は彼女の上着を脱がせるという行為だ。

上着を着たまま寝ると明くる日、体感温度が凄まじく寒くなるのだ。

しかし、この行為には凄まじい罪悪感を覚える……

意識がない女の子の着ている物を脱がせるのだから。

上着を畳んで枕にするべく積み重ね置き。

次に彼女をシユラフに収めて、胸ポケットに白金カイロを忍ばせる。(彼女に胸が無くても救われた気がするが、同時に凄まじく失礼な事を思った気がする)

それに重なる様に彼女の手を重ねてチャックを締め、頭の下に上着を置く。

ふと顔を見ると、天真爛漫に常に笑顔だった時とは違い、微かに上気した様に見える

その顔は恐ろしく美人に見えた……

それに思わず吸い込まれそうになるが、アカンアカンと首を振り、不浄な思考を蹴散らす。

俺は男である以前にスカウトであり紳士だと。

嘆息して彼女の顔を見ながら呟いた。

聞こえて無くても言うべきことなので。

「今日はありがとう、なでしこ……お休みさんせ」

そして逃げる様に彼女のテントから出た。

娘っ子に何をドギマキしてるのかと思いつながら。

しかし、湯たんぽを作るべく湯を沸かしてる間に忘れるだと、期待して……

うろの底

「うむう〜……」

お腹がムズムズして目が醒める……トイレだ。

そう言えば、いつの間にシユラフに包まってる……

だけど自分で入った記憶がない……

たしか、きょうすけさんと焚き火を囲んで過ごして……そのままの寝ちやった気がする……

じゃあ彼がここまで運んでくれたのか？

それに、ブランケットも上着も脱がされている……

それに胸元のこの温かいモノは何なのか？

猛烈に恥ずかしさが押し寄せる。

顔でお湯沸かせそうなほどだ。

「むう〜!!」

それを堪えるべく、顔をシユラフに埋めてジタバタする。

だけど、何も解決に至らない。

行かないと……

スマホの照明を点けて靴を探して外に出る。

真つ暗で霧が光を吸い込んで遠くまで照らせない……

コワイ、コワイ……

恐怖がつのる。

彼を起こそうと思うが。

それをするとは恥ずかしくて溶けてしまいそうだと思い。

思いとどまらせる……

が、恐怖はどうにもならない……

もう選択肢なんて無かった。

彼のテントへ走る。

あと少しと言うところで、脚が何かにすくわれた。

えっ？

一瞬の浮遊感の直後上下左右がわからなくなり、足が変な方向に向いたまま着地してしまう。

グキッと嫌な振動が響いて。

「きゅっ!!」

ズシャという音を立て転ぶ。

「なんだツア!!」

血相変えた臨戦態勢の彼が、鉈片手に飛び出して来た。

隠されていない左眼と目があった気がする。

……がそこに本来あるべき眼は無くして赤黒いうろの様な空間が広がっていた。

あの眼帯の下は本当に眼がなかった。

わたしはそれが怖くて硬直する。

彼は、ハツとした表情を浮かべ左眼を手で隠す。

とても気まずそうに苦虫を噛み潰した様な表情だ。

ため息をつくつと、鉈を机に置いてわたしに寄ると「すまん……大丈夫か?」そう声を掛けてくれた。

低く落ち着いた優しいようなその声に安心感を抱く。

が、左足首に痛みが走ったのは同時だった。

「いたあ……」

足首を抑える。

捻挫したみたいだ……

「挫いたんか? 立てるか?」

「はいつ!!」

慌てて立とうとする。

「んううう!!」

痛くてだめだ。

「こりやアカン……」

彼の右目を見て、コクリと頷く。

「……指は動くか?」

「指?」

言われたように動かそうとしてみる。

ちゃんと動く……

「……動きます」

「なら、多分折れとらんな……ちゆうても心配じゃけえ、朝まで様子は見よう……」

「……はい」

「戻れるか?」

トイレ行きたいのにそれはむり!!

「ちよつとまって!!」

「なんじゃ?」

「えっと……その……」

しかし、それを言うのは恥ずかしい……

奇跡的に転んだ時にも耐えたけど限界は近かった。

それこそ、このまま行けば、もっと恥ずかしいことに……

「お、おトイレ行きたいですう!!」

素直に叫ぶ。

その瞬間、彼は眉間にシワを寄せて凍り付いた。

彼に抱き抱えられ、トイレへと向かう。

ヘッドライトを斜めに掛けて、そのバンドで左眼を隠している。

「嫌なもん見せちまったな」

なぜわたしに謝るのか……

不可抗力なのに……

「そんなこと無いですよっ!! さ、流石にその下がそうなってるなんて思いもしなくて

驚きましたけど……」

「まあな、わしや訊かれるまでは言わんつもりじゃったしな……それに人様に見せて気持ちのええもんじゃないし、本当にすまん」

掛ける言葉が見当たらない……

「そう言えば、義眼とかじや駄目だったんですか？」

「ありや余計目付きに違和感出てくるし、義眼はコンタクトレンズ並みに常に清潔にせにやならんからキャンパーには向かんよ」

「そうなんですか……」

それは意外であった。

「ほれ、着いたど。わりいけどわしや君とは入れん、自力で行けるなら頼む」

「そ、そうですね……」

降ろして貰って、けんけん飛びしながらトイレへと向かう……

引き戸を開けるとパツと明かりが点く、人感センサー付の洋式トイレだ。

中に入り施錠する。

「その泥やらもふかにやなるまいて、わしやタオル取ってくるけえ安心せえや」
彼はそう言つてテントへと戻つて行つた。

本当に彼は優しい人だ。

それにこの独特な言葉の言い回しが、この人の柔らかさを強調させる……

こんな人中々居ないと思う。

用を済ませて、解錠して引き戸を開ける。

すると少し離れたところで、こちらに背を向けて休めのまま直立不動の彼の姿が目に入った。

その姿が、警備員みたいでおもしろい。

「すみません、だいじょうぶですよお」

「おう」

そう言うとは彼はわたしをまた抱えにやつて来る。

わたしも、それに甘えて抱えて貰う。

さっきの恥ずかしさは何処へやらである。

が、ちよつぱり恥ずかしい。

だけど悪くないと思ひ始めている。

なんなら、甘えさせて貰えるなら、彼にとことん甘えたいとも……

わたしは悪いやつだ。

それに彼の太い首にしつかり手を回せば、落ちることもない。

真正面に彼の横顔が来るので、少しばかりやつぱり恥ずかしいかなと思う。

「楽しそうだな」

「はいっー」

彼は一文字だった口元を解かせる。

彼も楽しそうだ。

そんなん事をしてると、もうわたしのテントの前に着いたのか降ろす。

……が中々体を持ち上げない。

暫くの後「その手を退けて貰わんにや儂が立てん……」と呟いた。

あ、そうだったとはにかむ。

彼はわたしに正面を向く様に促し、無造作に顔を拭く。

「ふがつ、ふ!!」

それから膝を拭いて、「後ろは汚れとらんけえ、己の前は自分でやりさんせ」とタオルを渡す。

なんどと思つてると、胸元とおしりを指さして「そこは流石に儂じゃようやらん」と

……

その発言にハツとして、恥ずかしさが再燃する。

「し、し、失礼しましたっ!!」

わたしは、テンパリながら貰ったタオルで拭いた。

彼は後ろ頭を掻きながら、「ちよつと中で待つてろ」と離れる。

汚れを払って、テントの中で待つていると、彼は湿布とそれを抑える為の包帯を持つ

て来た。

彼は「上がるぞ」と言うのとテント内へと入る。

そして、「足見せんさんせ」と言われて、わたしは素直に左足を差し出すと、彼は「握つてみる」と言つて握らせたりして暫く観察した後「やっぱ捻挫じゃな」と結論付ける。

「……すみませんね」

「いいやのうた、これ位はしちやらな、なるまあて」

彼はそう言いながら湿布を貼つてそれが剥がれない様に包帯を巻いてそれなりに圧迫する。

「ほれ、これでよかろう」

「ありがとうございます」

彼は用事が終わったと見るや、タオルを手にそそくさと立ち去ろうとする。

「きようすけさん」

名前を呼ぶとピタリと止まる。

「白金カイロありがとうございますました」

「……ああ」

眼帯側の横顔だから、表情解りにくいけど笑つてる気がした。

「お休みさんせ、なでしこ」

「きょうすけさんこそ、おやすみなさーい」

そして気が付くあ、今、わたしを始めて下の名前で呼んでくれたと……

「ふふっ、うれしい」

わたしはそれが嬉しくて、足の痛みなんて忘れてた。

「外伝」 在りし日の約束

微睡んだ意識の中誰かに揺すられる。ほつといてくれと思いながら手を払う。相手はそれに腹を立てたのか定かでないが、鼻を摘む手段に出る。流石に呼吸が苦しくてジタバタしながら、わかったわかったと降参の意をもって起き上がる。

先ずは視界の暗さがやってきて、次に寒さを感じて縮み上がって息を飲めば、鼻孔が微かに甘い香りがした。優しく落ちて着く匂いだ。

「きよつちゃん!!いつまで寝とーの? ウチと配給取りに行こーや」

その声の主は、小学生中学年と言っても通じる程背が低く、肩まで伸ばしたサラサラとした黒髪は優雅で美しい。それに優しい印象を与える垂れ目がかわいい女の子で、名は田原撫子という。俺の唯一無二の親友だ。

彼女が居なければ俺は学校でも完全に孤立して孤独の道を歩んでいただろう。そして、誘われてボーイスカウトにも入ることは無かっただろう。

故に俺の恩人ではあるが、滅茶苦茶お転婆で時々うるさい……だが不思議とそれも不快ではなく、寧ろそれさえ心地良いと思えるのは不思議なものがあつた。

「さ……さ……さ……この寒さはやれんのう」

朝霧高原は真夏でも最高気温が二七度と涼しく、温暖な平野部の人間からすればかなり涼しく快適だ。しかし朝方は、十八度まで冷える故に温い地域の人間にはキツイ。

その中でも俺は極度の寒がりで、気温が三十度前後ある夏しか愛せない男故に、この朝は寒過ぎた。よって今、ガタガタと震えている……俺だけ……

「きよつちゃん寒がりやからなあ……」

「寒いのはどねいもならん、三五度の湿度三割ぐらいじゃねえとやつちよれんわ」

時々、先祖は雪すら降らない南方の出じゃないかと思う。

「きよつちゃん快適でも、ウチらが保たんわ」

「何を言うか？ 乾燥した暑さは素晴ら——」

「バカ言つとらんと、置いてくで？」

「あ？」

急いで適当に寝袋を丸めたものの、足の踏み場もない有様のテント（五人用に七人＋荷物）のカオスに辟易しつつ、己の荷物の状態を見る。

が、どうやら幸運にも誰の下敷きにもされておらず、今ならば、寝袋を突き込めれると、即実行。

次に室内に干していた己のIDカードと参加隊のネックチーフと作業帽を着用し、入り口に乱雑に並べられた靴の中から己の長靴らしきものを選んで履いて外へ出る。

やはり薄暗く、霧が立ち込めていて何も見えない。

ヘッドライトの光を灯せば、二十メートルやそこらで拡散・減衰して効力を失う。そんな状態だ。

朝霧という名の通り。

それに、ここに来る前の彼女が「ここめっちゃくつちや富士山見えるんて」等と大ボラ吹いてたが、もう中日を越えたと言うのに、一度として富士の雄姿を拝めた試しが無い。

いつもいつも……霧の向こうで見えやしない……見たことないやつ、見た事あるよ
うな語り口にまんまと乗せられた俺が菌痒いかった。

どちらにしろ、彼女を追わねばならない……己の仕事は終わってない。意識をやらねばならぬ事に指向しそれに掛かる。

調理場のマーキーテント所から、配給回収用の背負子をひったくり彼女を追う。幸い行き先は記憶しているので造作なく追いつけるだろう。

ただ、足元に気を付けなければならない。

自サイト内はまだ牧草地としての原型を辛うじて留めているが、一步通路に出たら草は蹂躪され、最早道と呼ぶのも憚られる様な泥沼と化していたりする。道そのものがト
ラップなのだ。

当然こんな所で走れば靴が埋まって抜けなくなり、顔から泥に突つ込む羽目になるだろう。しかし、端の方とかはまだ道としての体裁を維持しているのでこちらを通る。これが人が多い時間だったら出来なかつただろう。

そして今、寝起き故に強い尿意を感じている。が、幸いこれの人間も少なくて行くなから今だろう。

己の用を済ませて、配給の列に合流する。

まあ、最後尾に行かず、並んでいる彼女を見つければ良いだけだが。流石にこの人数は忌避感を禁じ得ない。

だが、探さねば己に課せられた任務を達成できない。

やれやれと思いつつも、どこ行つた？と思いつながら探そうとするが、十秒もせずして簡単に見つかった。

なにゆえかと言えば背が低い為に、列の人混みから背負子が低い位置に生えているのと。俺を探す為か必死に背伸びしてる。かわいらしいのが目立っていた。

「見つけやすくて助かるわ」

「それどう言う意味なん？」

若干食い気味な返しが来た。俺何か不味い事でも言つたか？否、記憶にない。

「わしやなんも悪い事は言うたらんやろが？」

「いいやの、その顔にウチがこまくて見つけやすいつて書いてるわ」

それを気にしてたのか? てか、それはアドバンテージというのでは? だって、背丈低い方がかわいいし、色々と有利な気が……

「いいやの、お前はそれが己の価値やと理解し取らん」

「何でや? そねいにこまいのがええんか?」

「そりや、こまい方がかわいらしゅうてえ——グツ!」

ドムツ!! という鈍い音が飴し、直後鈍い腹痛が脳天を突く。鳩尾にクリティカルを貰った。

思わず膝から崩れ落ちそうになるが、得意な痩せ我慢で堪えつつ、流石に二撃目を喰らいたくないので手で彼女の頭頂を押しさえつける。頭一つ分程、背丈が違う故にかなり有効な手段だ。

「いてえじゃねえか……」

「この朴念仁!! わからず屋!!」

彼女は抗議を主張しながら俺をぼかぼかと殴ろうとしてくるが、圧倒的に腕の長さが足りず届かない。だが、そんな事をしている己が虚しくなった。

俺は天を仰ぎ「わしやそれがええ言うとるやろうがあー」と遠吠えの様な狼狽をあげた。

配給の帰り道、彼女は拗ねて口を効いてくれなくなった。流石に危機感を覚えた俺は必死に取り繕う。

「ホンマにすまんっちゃ……今度たこ焼き奢っちゃやるけえ、勘弁してくれえや……」
「……」

疑念に満ちた視線が痛い……てか、この場合俺は何をすれば良いんや……必死に考えるが、答えは見つかからない。

「國守！ちよつと手え貸してくれえや!!」

トボトボと自サイトに帰り着いた所で、朝飯の準備を指揮している班長に呼ばれる。

「了解!!」

思考のスイッチをトグルして、そちらへと指向する。横目に彼女が「あ」と言いながら手を伸ばすのが見えた気がするが、俺は止まらない。

「國守、火熾し手伝ってくれーや。あいつらじゃ事にならん」

「了解、じゃあ代わりにコイツ頼みます」

背負子を班長に強引に押し付け、火熾しに失敗している連中の中に押し入る。

「お前らなんしよるか？」

「恭介さん、何度やっても火が点かないんですよ……」

竈口の中に手をつ突っ込んで、冷えている事を感じた上で、中身を掻き出す。すると

すぐに原因が判明した。

薪が太過ぎる上、霧か露で湿気ったままのもそこにはあつた。

「お前ら……それじゃ点く訳無からうがや」

小言を言いつつ、己のテントへ駆け、腰鉈とオイルライターを拾ってくる。

共用の鉈はあるが、枝打ち鉈では話にならんし、他人の刃物を使うのは嫌いだ。

何故なら、皆研ぐのが下手くそなのか、全く切れない鉈ばかりだからだ。

それに鈍程、負傷のリスクが上がるといふ経験則があり避けている。何故なら、本来不必要な力を掛けねばならず、それで滑って己の身を切ったりすれば相当深いものとなる。その上、断面が千切れる様になる為に、治りも遅く痛みも相当のものだろう。

一方、鋭利な方では切れるから、余計な力が要らず、仮に怪我しても比較的浅く済む。それに、断面が綺麗なので痛みも少なく、治癒も早いのだ。

杉の薪の外に面した面を薄く割いて、濡れてない芯を表に曝し、割り箸程度の大きさの細割に加工する。

それを一握りと少々作ってそれを、竈の中に丸めた新聞紙を核に放射状に並べて、その上に更に松葉を重ねる。

準備が出来たら、肥松立ち枯れて朽ちた松だが、油脂が多い部分が朽ちずに残った物（適当にそこからへんの山に登れば手に入る）の欠片を手にする。

ジャツ！ジャツ！ジュボツ！！とオイルライターを灯して、その火を肥松の欠片へ移す。すると肥松は黒煙をあげて油脂が燃え、それを松葉と新聞紙の間に突き込んでそれに空気を送れば火が熾る。

次第に刺激性のある白煙が登り始めたかと思えば瞬く間に火炎となつて吹き上がる。その熱が下へ重ねた物を燃焼に必要な温度にプレヒートする事となつて、全てに火が回る。

やはり、火の番は良いものだなとつくづく思う。

あとは太めの薪を、竈口中央奥を頂点として^{山型}に左右交互に重ねてゆく。

太めの薪に火が付き始めたところで班長に報告しにゆく。

班長の目の前に立ちお互い向かい合い、彼に三指礼三本指で行うボーイスカウトの敬礼を行い、彼も返礼し気を付けの姿勢を取る。

「報告口：火熾し完了。次の指示を願います！」

「流石國守……火熾しに失敗した連中はここに来る様伝えてくれ」

アイツらクビやな……まあ当然かと思うが口にはしない。

「了解！！では戻ります！！」

再び一連の所作を繰り返してから持ち場へ帰る。

帰ったら、己の熾した火でもないのに、火遊びに興じている連中の姿が目にとまった。

コイツら……と若干腹が立つが表情や態度に出さず。皆を集めて「お前ら、班長がお呼びやぞ」と伝える。

あからさまに嫌そうな顔をしながら去ってゆく。しかし、それはお前らが情けないからやぞと思うのは、当たり前だと思うのだ。

暫くして俺の助手として撫子がやって来た。

「ウチはこつちやれって」

彼女が指を指すのは、もう羽釜を乗せない方の竈だった。

「なら、こつちの火を分けるけえ、準備頼むわ」

「りようかーい」

彼女は、俺が竈の上で予め炙って乾かしていた薪を、隣の竈口の奥に置いて、今から入れる燃える薪の枕とする。冷えた竈に直接置くと、熱が奪われて火が消えてしまうからだ。

彼女とは同じ団の人間だ。故にその所はよく知っている。

「い、いよ」

そう言われたら、俺は燃え盛る原型を留めている二本の薪を素早く移す。

彼女は、隙かさず空気を送って炎が消えない様にする。やはり、知ってる者は違うなと。

「やっぱお前に限るのう」

「ウチもきよつちゃんに限るよ」

「はは」「ふふ」と互いに笑みが溢れる。

「やっぱ火の側っていいね」

「そうじゃのう……」

お互い言う事が無くて暫くの沈黙が訪れる。

「そういや、さっきのを改めて謝ろう。そう思つて口を開けば、「おい」「あの」と、お互い同時に喋ろうとしてぶつかる。

どうぞどうぞと譲り合う応酬の末、最初に発言権を得たのは俺だった。

「さっきはすまんかったな……」

彼女は鈴を鳴らした様な声で笑いながらに「もういいよ」と飛び切りの笑顔で答える。彼女の微笑みは最高にかわいい……誰よりも。

俺は何だか見つけるのが、こつ恥ずかしくなつて目を逸らそうとするが、俺は彼女の手に正面から抱き着かれる様に捕らえられ、犬つころをワシワシ撫でくりまわす様に「おー、よしよし」と揉みくちやにされる。鼻腔が彼女の匂いに満たされる。

「やめろお」と口で抗議するが言が逃げる気になれず。されるがまま。

彼女が急に動きを止めたかと思うと「あー!!」と叫んだ。

「今度はなんだ？」と「急にたけつてどねいしたか？」と訊けば。「富士山見えるよ!! あんなに大きく見えるなんて知らなかったよ!!」と興奮気味だ。しかし、俺は拘束されたまま。

「すまんが儂も見たい、離してくれ」

彼女は思い出した様に「あ、ごめん」と言つて拘束を解く。

向いた先で見上げた富士は、余りに雄大で今まで見て来た景色のどれよりも、綺麗だった。

彼女は、俺の背中に抱き着き直して、耳元で囁いた。

「きよつちゃん、大人になつたらまた来ようね」

俺は「ああ」と短く返事を返した。叶う約束だと信じていたから……

軍馬で行こう

野営準備「上」

ある平野の住宅街にある、古風な民家の広い庭の一角にて、耐火煉瓦で拵えられた青白い炎を吹き上げる炉の前で汗を流す男が居る。

左手で電動ブロワのスロットルをコントロールしながら目の前で燃え盛る骸炭が吹き飛ばない様に調整し、右手に握る大型のプライヤで、骸炭に埋めた刃の茎を握っていた。

時々刃を抜き出し色を見る。それを何度かした後、所定の温度を満たしていると見るや、男は刃を燃え盛る炎の中から引き抜き、隙かさず、油の満たされた箱の中に漬込む。

ジョワアーツ!!と油が沸騰し、その蒸気が空へと登っていく。そして十分冷えた時に取り出したそれは、漆黒の炭素を纏った刃として生を受けるのだ。

△▲▲▲▲▲▲▲

野営準備「上」

▲▲▲▲▲▲▲▲

富士、朝霧高原でのキャンプから帰ってから、今日で丁度二週間となる。

二日目の朝に富士から登る朝日が拝めるかと思つてたが、生憎霧のせいで見えず。ボーイスカウトの仕事もあるから残る訳にもいかずと帰らざるを得なかつた。

しかし、あのキャンプで俺が見ている世界に色が付いた気がする。あの娘のお陰なのか不明ながら、どこに行つても付き纏つていた、他人からの拒絶感と言うのが和らいだ気がするのだ。その事は撫子の三周忌と言うことで法事に参加した折、墓前で心の中で報告した。当然、爺様にも同様に。

今日は庭に拵えた鍛冶場にて、二振りの剣鉈の焼入れ作業を行っている。一本は九ミリ厚にして刃渡り二四〇ミリ、幅五十ミリの何でも叩き割れるのを目的に拵えた物。もう片方は常識的な六ミリ厚にして刃渡り一八〇ミリ、幅三五ミリの普遍的なのを拵えた。そして何れも、鋼材は最高硬度と靱性を併せ持つ鋼を主にして、普遍的に用いられる刃物用ステンレス鋼を張り合わせ、何層にも織り込んだ積層鋼だ。前者の鋼を本割込とした究極の一振りに仕上がっている。研いで磨き上げる事で浮かび出る、独特の刃紋はとても美しいものだ。

その時携帯がバイブした。研ぎ汁でまっ茶色に染まった手を作業着のズボンで拭いて、スマホを取り出す。

『恭介さん、今何してますか!! (≡▽≡)』

等と絵文字付きの文面が送られて来ていた。誰だこれ？と疑問に思ったのも束の間、なでしこと連絡先交換したんだっけなと思ひ出した。

「そうやそうじゃったな」

そう呟いて、ふふと笑う。

『剣鉈を新造したぞ』

そう文言を入れて、刃紋が良く写るような角度で写真を撮って送る。

『めちやくちや綺麗ですが、作ったんですか?!Σ（。∩。）』

『無いものは、作ってなんぼだからな』

『恭介さん、やっぱりすごい人だなあ』

『どうだかな?』

『すごいですよ!』

『なら、そういう事にしちやろう』

『もし、どこかでまたお会いする事があつたらそのナタ見せてください!（≡▽≡）b』

『わかった。その時はまた宜しくな』

『はい!喜んで!（∨3∨）』

スマホを仕舞い、元氣そうで良かったなと思ひながら、作業を再開した。

△▼△▼△▼△

明くる日の朝、俺は孟宗竹や真竹が自生する竹林の中に設けられた野営場に向かった。ここは一般には開かれてない我が団のみが使用する事を許された野営場。故に関係者以外は立ち寄らない。その為ここで法律的な範疇に於いて、何をしようとも片付けさえしておけば、誰にも文句は言われない。

ここで何をするのかと言えば、一つは昨日拵えた剣鉈の試し切りである。

早速二振り剣鉈の鞘を革製で分厚い安全帯に通して、竹林に入る。竹林は見通しが良く日差しも良く通り、整備されていると言うのがよくわかる。しかし、その竹林の端の方はそうでも無く、密集して生えた竹によつて、荒れ果てている。そんなところに現れたのは、俺という侵略者だ。

一本の孟宗竹を標的に据え、大振りの剣鉈を抜き上向きに構えて振り上げる様に一閃、振り上げられた分厚い刀身は孟宗竹の強固で分厚い繊維を物ともせずには撫で斬りにし、本体から切り離された竹がドスンと落下した刹那、振り上げた刃を翻してトドメの一撃を浴びせるのだ。

「まーた、竹相手に喧嘩してる……」

そう若い女の声がして振り向くと、長い黒髪と低い背丈と少し垂れた目をした娘が、仕方ない人だなあと言いたげな目をして俺を見ていた。彼女は我が団唯一のベンチャー隊ベンチャースカウトとは中三から高三の間の年齢の区分のスカウトのスカウ

トだ。

「なんじゃ、お前か……」

「なんで残念がるんですかあ?」

「そりやお前じゃけえのう。んで、何用じゃ?」

「もう、ひどいなあ……」

彼女は撫子の妹のさやかだ。容姿こそ良く似てるが、性格は冒険的で素っ頓狂で嗜好きなのか、そう言った類の話には食い付いてくる上、嗅覚も鋭い。

「是非とも、明るくなられた秘訣が知りたいなあと思ひまして」

「……まだ言うか?」

「一回気になると、夜も寝られないと言いますかー」

「……はあ……」

これ以上その件で付き纏われるのも厄介だ。都合の良い言い訳は……

「端的に言うが、わしゃ仕事辞めたぞ」

「えっ?!うそお?」

「儂自体が人嫌いじゃからと言うのもあるが、あんな能無し共と仕事なんぞしちゃおれんわ!!」

「じゃ、じゃあ……?」

「晴れて独り身、無職やぞ」

「まさか、その左眼の賠償金だけで？」

「まあ、そんなところじゃ」

大嘘である。宝くじ一等の効果なしではそれで生きては行けない。

「……ほんとお？」

「ホントやぞ……て、妙に疑るんだな？」

「そりゃあ、まあ……」

「……んで、他に用事は？」

さやかは首を横に降つて否定する。

「じゃあ、用事済んだんなら、帰りいや」

「ええ〜」

「不都合でもあるんか？」

「そんなにじゃけにせんでも、ええじゃないですか？」

「……わりいこた言わんが、お前が居るとわしや鉈振り回せんのやが？」

「邪魔でした？」

「当然じゃ。てか、新造の劍鉈の錆になりたきや、オメエを被検体にしても良いんじやがな。無論やらんがな」

「やった日には、お姉ちゃんに怒られるだけじゃすみませんしね！」

「……」

「なんで無視するんですかつ！」

コイツもコイツで、頼れる姉が居なくて寂しいのだろう。だからと言って、俺に構う必要はないだろう？しかし、それを態々訊くつもりないし、大してそれに興味はない。

剣鉈二本の耐久試験が済んで、野宮場に戻ると、焚火を熾し、それにヤカンを掛けて湯を沸かしているさやかと目が合った。

「お前、まだ居ったんか？」

「居ちや悪いんですか？」

「そねいなこた言わんが……まあいい……」

「あつ、コーヒーありますよ」

「……じゃあ、もろおう」

そう言つて、腰の安全帯を解いて、焚火の傍らの大きな石に腰を下ろし嘆息する。さやかは、作業しながらも、未だ何か訊きたげな視線を向けてくる。これ以上付き纏われるのもいい加減面倒くさく思ってきた。

「のう、さやかよ」

「やつと話す気になりました？」

「いいやのうた。お前には儂がどう見えとる？」

「あーそれですか」

さやかは、こう言った。

一つは俺の表情が柔らかくなって、態度も幾ばくか軟化したこと。二つ目は俺の変化に何者かの影響を感じている事だった。

「二つ目が気になって仕方がなかつたと？」

「そうなりますね」

「なる程……腐つても流石は撫子の妹だけあるなあ……」

「それ、褒めてるんですか？ 貶してるんですか？」

「文字通りプラマイゼロじゃ」

「ええ〜」

「んで、こつから先は他言無用で頼む——」

先日の朝霧での話をした。主だつてはなでしこという娘の話だ。

「あなた様でも赤の他人と仲良くなれるとは……ましてや私と同年の女の子と

……」

「儂としても不思議じゃったよ」

「まさか、襲ったりしてないですよね?!」って、あいたつ!」
ふざけた事を言うなら、鉄拳制裁を課す。無論パワーセーブして。

「バカタレ」

「うう、ぶつ事ないじゃないですか!お姉ちゃんに言いつけてやるう」

「別に構わんで、お前は事あるごにしばいて良し、と撫子から言われとるしな」

「嘘だア!!」

無情にも味方の居ないさやかは、狼狽する他なかつた。

「そーいや、お前ここまでチャリで来たんか?」

「お姉ちゃんのお下がりのカブで来ました」

「……この親不孝者め。よう親御さんが許してくれたな?」

「お父さんは許してくれたけど、お母さんが中々許さなくて……」

「婆様は?」

「お婆ちゃんも許してくれましたよ。その上で、お母さん説得してくれたんです」

「なる程な……んで、乗っ取るのは撫子の軍馬カブか」

「そうで〜す」

「……その軍馬にはずい分と助けられたな」

「お姉ちゃん、二人して遅刻しそうな時になった時も二人乗りして行ったよね？」

「そんな事もあったな……」

思わずして、あの日あの時の光景が蘇って幾ばくか目頭が熱くなる。しかし、既に枯れ果てた涙は溢れない。

「そう言えば、お姉ちゃんとツーリングするからって整備してた、お爺さんのバイクはどうしたんです？」

「長い事故つとつたが、今はおいさん叔父の事の所で組み立ててもらーとる」

「早く組みたつたら良いですね！それじゃあ！」

「ああ、お前も気を付ける。ソイツは優秀な軍馬じゃけど、チャリンコ乗るのと訳ちやうど」

「そりや、重々わこうとりますけえ！では、隊長！いつものお願いします!!」

さやかはビシリと踵を整え、直立不動の気を付けの姿勢を取る。こちらも気を付けの姿勢をとつてから、右手で拳を作つて胸の高さまで上げ、下に手を開きながら振り下ろす。そうすれば彼女は安めの姿勢をとる。そして、その逆の手の所作を行い気を付けの姿勢を取らせたところで号令を発す。

「別れ!!」

「別れます!!」

互いに三指礼を交わし、俺が礼を解いた所で彼女は動き出す。

「氣い付けて帰れよ」

「はーい」

そう言い残し、去りゆく彼女の背中を眺めながら俺は心の中で祈った。

撫子よ、お前の妹はお前と同じバイク乗りになるじやろう。そして、お前とおんなじ目に遭わん様を守っちゃってくれ。

その刹那、温かな風が吹き抜ける。それは丸で、彼女が肯定してくれている様だった。

野営準備「下」

ガレージの奥にソイツは居た。

セミブロックタイヤを装備し、数本のパイプと底板でガードされた剥き出しのエンジンと、座席の前に鎮座するマットグリーンに塗られた燃料タンク。そして、本来タンデムシートなのをシングルにして、廃された座面は、大型の荷台となっている。故にこの鉄騎は軍馬と呼ぶに相応しい程に堂々たる風格を醸し出していた。

△▲▲△▲▲△▲▲

野営準備「下」

▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲

田舎の山道と言うのは、いつ走っても気持ちが良い。街の喧騒から切り離され、エンジンの音やロードノイズや鳥のさえずりがよく聞こえて癒やされる。その上渋滞とは無縁のストレスフリーな道を征ける。

して、今何をしているかと言えば、端的に言えばバイクに跨っている。ただ、一概にバイクと言っても爺様から受け継いだコイツは違う。

見た目は只のネイキッドバイクに近いが、積載能力向上の為に、本来タンデムシ-

トだったのをシングルにして大面積の荷台を設けている事で、荷物が多くなりがちな長旅にも十二分に堪える事ができる。

そして、最大の特徴は見た目じゃわからない。排気量六五〇の排気タービン排気ガスを圧を利用してエンジンに空気を過給させる装置付の直列二気筒ディーゼルエンジンを搭載している点にある。このエンジンは爺様が特注したエンジンで本来は排気タービンは付いていない設計だったが、叔父が設計変更して取り付けた上に、燃料加圧噴射装置も取り付けられ、本来の性能以上の性能を発揮する事が出来ている。故に低中速域のエンジン回転速度では、一律で最大トルクを発揮可能で、一五キログラム・メーターもトルクを発揮する事が可能だ。故に計算上での最大牽引力は、四八〇キログラム・メーターもの力を発揮し、最大登攀角度は六三度としている。(まあ、そんな崖は登らんが)

しかし、難点があると言えば、巡航時やアイドリング時にディーゼル特有のガラガラと言った、ノッキング音を打ち鳴らし、加速時には、キユオオオ!!と言った、ターボの音?が凄まじくよく聞こえる為に、人目を惹いてしまうというのが欠点だった。

だが、優秀な“軍馬”である事に変わりはない。これからは俺の相棒として働いて貰う所存である。

暫く走り続け、細くクネル上り坂を駆け登ると、草花の緑が萌えるなだらかな丘陵地

帯に出る。広がる景色の一面に幾千幾万もの羊の群れと見紛うばかりの白亜の岩が群れを成す。そう、ここはカルスト台地。そして、国内最大の面積を誇る秋吉台だ。

「おお……」

暫く走った所にある。広い駐車場にて軍馬を停める。そこから徒歩で西の方に見える丘に向かう。

駐車場の北の林の道を行き、道路の下に穿たれた人道トンネルをくぐって西側に抜け、その先の道も人が歩けるように草が刈られて、路肩には小さな花が健気に咲いているのが見える。それを暫く行き、登ろうとしている丘の中腹に、それはある。

そこには旧帝国陸軍の演習場だったという看板が立っていた。その傍らの緩やかな斜面に、草に埋もれてこそいるが人工的に土を掘り返して作ったであろう、そこその深さがあって細長い溝体がある。その幅は人が二人ほど行き来できれば良い程の幅しかなく非常に窮屈な作りだ。しかし、それでこそ塹壕と言うもので、この狭さが驟雨の如く降り注ぐ砲弾から、確率の盾としても、物理的な盾としても護ってくれるのだ。しかしながら、よくもまあこんな所で八十年程も風化せずに遺つたものだと感心させられる。

塹壕に別れを告げて更に登り、その頂きへと到達する。そこそこに高い丘なので、遠方までよく見渡せる。ウエストポーチから取り出した単眼鏡を覗けば、遙か遠くまで続

くカルスト台地の風景が一望できる。

その、八倍率の単眼鏡で見える景色も格別であるが、一点惜しいのはミルスケールミル \parallel mil とは 1000 m 先に 1 m の物体がある時の見える幅の角度の単位でミリラジアン \parallel mrad と置き換えられる。幅の定義は円周 π を $1/6400$ にしたものを $\text{mil} \parallel \text{mrad}$ として扱う。運用例として、距離が不明であるがそれを求めたい。丁度幅 0.5 m とする人間が正面に見えており、その角度は 0.25 mil だった。その場合は 距離 X [m] \parallel (物体の大きさ [m] / 角度 [mil]) * 1000 と計算を行い実際の数値を当て嵌めると $X \text{ m} \parallel (0.5 \text{ m} / 0.25 \text{ mil}) * 1000 \parallel 2000 \text{ m}$ で 2000 m と求められる。のレティクル付故に、景色にそのレティクルが反映されてしまうのだ。

しかし、地形図片手に、山頂の構造物やランドマークを用いて距離を求め、コンパスグラスで角度を、そしてそれをベースプレートコンパスで単一標的から己の位置を割り出してそれを記す……そう言うことをするなら楽しめるであろう。

そんな事を思ってた矢先、スマホがバイブした。

『恭介さん！今日は何をされてますかっ！ (MII△VI)』

なでしこからだ。この娘は忘れん程度に連絡してくるなど思いながら、返答を打つ。

『今日は秋吉台に居る』

『秋吉台?』

『山口にある日本最大のカルスト台地……言うなら、クソデカイ石灰の一枚岩だよ』

『めちやデカイ一枚岩?!?! (;)』

手前の岩のその向こうにピントを合わせ、それっぽく撮り送る。

『ふおおお!! キレイな所ですね!! (? . . . ? . . . ?) ?』

『んで、地下には鍾乳洞が無数にあつて、これもまた国内最大の秋芳洞という大きな鍾乳洞もある』

『へえ、行つてみたいなあー』

『そのうち、来たらええ』

『いつか絶対行きます! では。 ノシ』

一人で居る時は、緑も蒼も白もすべてがただの色でしかなかった。しかし今、輝きに満ちて見えるのは、孤独じゃないからだろうなと思わずには居られなかった。

帰宅して、次回の遠征に持ち出す物品の選定を行う。

今回はこの軍馬で行つてやろうと思つているが、トラックの様に常に何でもかんでもガン積みという状態にする訳にはいかない。それも当然、幾ら重貨用でも、面積もトラックのその量に遠く及ばないのだ。故に必要最小限の、着替えと寝床と調理する為の

火に照明暖房と鉋やナイフやライターと言った物を確保したい。

暖房は着るものと、白金カイロで済ませるがコンプレッションバッグに詰めとけば、嵩張らないから良しとしよう。

して、大幅に削られるべきは照明である。ランタンはデカく嵩張る上、ガラス製のホヤを使用している故に移動中に割りそう。仮にホヤが破損した際は高級かつ巨大な不要物として、ただでさえ狭い面積の内の大面積を占拠する様になってしまいうだろう。よつて、ヘッドライトで十分だし、それで済ませよう。

次にテントとタープだが、こいつらは必要装備なので削れないが、タープのポールを六本だったのを二本に減らす事で軽量化を図る。

次に寝具だが、新たにダウンの物を調達したのでこれを使うが、今まで使っていた同性能の冬用シュラフに比して、かなり収納面積が小さくなって、今まで春秋用として、ボリースカウトに入ってから十年來使っていた物よりも小さくなってしまった。ダウン恐るべし……後は、コットとマットだが、コイツラはそもそも面積を、喰わない作りなのでそのまま持つていく事とする。あと、ダウンシュラフと同メーカーの防水透湿シュラフカバーも調達したので、ほぼ野晒しで寝たい時にでも使うとしよう。

次は炊事具だが、炊飯用コッヘルを除いた、コッヘル二つとコップと箸とスプーンフォークと言った通常通りのセットで運用しようと思っっているが、今回は米を持って移

動する余裕が無いと見ているのでそれで十分だ。故にガスストーブは小型なので緊急予備としては持つては行くが、原則としてケロシンストーブのみを運用していくつもりだ。

あと、焚き火台は外せないので持つていくが、薪を持つて長距離移動するのは余りに無謀で、湿気らせたら終わりなので、近くで薪を調達できる時のみの運用とする。

アイテムを車庫に続く勝手口に並べたので、晩飯の支度としよう。よつて作業はそれからだ。しかし、手元にあるのは冷凍うどんと麵つゆのみだ。よつて釜揚げうどん安定と言う訳だが……まあ、ウドンスキー・ススロフ（だからそのロシア人誰や？）にとつては、全く苦でもなく毎日うどんでも飽きることは無い。故に問題ない。

「たいちよー、居ますかー?」

玄関から、さやかの声が聞こえたが、なぜ奴は呼び鈴を鳴らさない?そんな疑問を懐きつつも、対応するには折角温めたばかりの鍋の火を止めざるを得ない事に、少々不服を覚えるが仕方がない。

「居るぞー」

玄関にの引き戸を開けると、何やらビニール袋を提げたさやかがそこに居た。

「たいちよー!飯ご一緒しても良いですか?」

「お前は何を言うとするんだ？年頃の娘が？はよ、家帰れや」

引き戸を閉めようと取っ手に手を掛けた刹那、さやかが首を挟む事で阻止してくる。

「いいや、待ってください!!」

「待たん!!」

さやかか頭を右手で押し返ししながら、左手で戸の取っ手を掴んで閉めようとする。しかし、さやかも負けじと、右脚を差し込んで来る。それは流石に対処不可能……しかし、意地の張り合いでは同等故に拮抗。その応酬の末に、ガツ!!と音が響いて、戸が動なくなる。戸がレールから外れたのだ。

「ワヤするでお!!ワヤ!!ひどいとか雑なとかの意」

「隊長!!いい加減諦めてください!!」

「いいやのうた!!」

「じゃあ!訊きますがっ!なんで、お姉ちゃんは良かったのに、私は駄目なんですかっ!」

「ぐっ……」

余りに真当な反論を喰らった刹那、終ぞ脱力し、さやかか侵入を許してしまった。俺の敗北である。

「お前……それ言うのは反則ど……」

「へんくうな國守隊長には、言われたかありませんよーだ！」

さやかは俺の態度に腹を立ててるのか、頬を膨らませている。ならば、ここから去るのが合理的な判断だろう。しかし、女の子という生き物は違う。

「……そねいに、はぶてんなーやそんなに腹を立てるなの意」

「じゃあ、ご飯作らせてくださいよ……」

「……好きにせえ……」

そう言うときやかは、勝ち誇った様に鼻歌歌いながら、台所へと歩いて行つた。つくづく、女の子という生き物はわからない。

思えば、就職した年に爺様が亡くなった後、広い家で独りぼちになつた俺は、家の事を全てしなければなくなつた。そんな折、撫子が俺が寂しくない様にと、家に来ては弁当作ってくれたり晩飯作ってくれるようになった。有り難かつたが、同時に気を使わせてる様で非常に申し訳なかつた。だけど楽しかつたのも事実だ。

流石撫子の妹だと思ふのは、そういう所で人に要らん世話を焼きたがるところか……

手伝おうとしたものの台所から追い出されてしまった俺は、車庫の中で軍馬に荷物を搭載する準備を進める事にした。

車体の後部の左右に二五ミリ機関砲弾が百発収まりそうな大きさで、米軍放出品としてよく見かける様な構造をしたODマツトなステンレス製の弾薬箱を取り付ける。荷台には、底面が硬質樹脂でできた、バイク用シートバックを括り付けたが……如何にもこう……前線に機関砲弾でも輸送しに行くのかな？と思う様な格好になって少しばかりか愉快に思えた。

「まあ、こんなもんやろ……」

それに荷物を詰め込んでさあ戻ろうと思った時に勝手口が開く。

「ズーはーんー!」

「おう、今行く」

「あつー!それ!!例の?!」

さやかは目の色を変えて、慌ただしくボタンと戸を閉めた途端に、ドタドタと走る音が響き渡る。しかし、家の中で走るな!!と怒鳴りたかったが時既に遅し。玄関から出て来た所で拳骨を一発落とすのがやっとだった。

「あーいたよー……」

脳天を擦りながら涙目で、なんで拳骨喰らったのか解らないと訴える瞳と目が合うが。

「己の所じゃ、家の中で走ってもええと習うたんか？」

俺は忽然と教育者としての態度は崩ささぬ。何故なら俺は隊長であり指導者であり、コイツ等の模範でなければならぬからだ。

「ううー、ごめんなさい」

「ならば宜しい」

教育は以上である。

「んで、お前アレが見たかったんじやる?」

「はいっ!」

さっきまでしばかれてしよぼくれてたのも忘れ、目の前の物に興味がある物が映ると、すぐそれに意識が指向する。

「お姉ちゃんに乗ってたバイクと同じネイキッドだけど、後ろはシートじゃなくて荷台なんですわね」

「そりゃ、誰も乗せる必要がないからな」

「彼女とか乗せる気無いんですか?」

と言われても、俺の性格的に一生独り身だろうし、縁のない話だ。

「バカ言え、俺にそんなんでできると思うか?」

そう言うのと、さやかはくふふと笑う。

「まあ、國守隊長へんくうですしね。……………」

「へんくうで悪かったな。あと、なんか言うたか？」

「いいえ、何も言うとりません」

さやかはそう言いながらそっぽを向く。何なんだ？と思いつつ、あきらまじやと流す。

「なら宜しい」

「はいっ！」

さやかは返事を返し、目の前の軍馬に視線を戻す。

その暫くの後。

「エンジン掛けてみても良いですか？」

と訊くので許してやる。

では早速と、キーを回すがセルは回らずエンジンは掛からず、表示灯が点灯するのみである。

「えっ、うそお！なんでえ！」

と必死に始動ボタンを探すが見当たらず、困惑している様子をひたすらに眺めほくそ笑む。……まったく己も悪い奴だ。

そもそも、なぜエンジン始動ボタンも無ければ、キーでセルが回らないかと言えば、そもそもこのバイクはセルを搭載していないからだ。良い加減、可哀想に思えてきたのでネタバラシしてやるか。

「悪いがソイツはセルモーターは積んどらん。キックスターターのみや」

「あつ、ホントだ！……てつ、重すぎイ!!」

さやかは全体重をキックスターターに掛けている様だが、姉同様低身長故に体重が軽くてスターターが回り切らず途中で止まってしまっている。

「まあ、貸してみいさんせ」

さやかから始動役を交代し軍馬に跨ると、スターターを踏む右脚に力を込めて蹴り出す。

ドルッン!!ドルッン!!ドッ!!

三度蹴飛ばして、車体右下を水平に伸びるマフラーより黒煙を一瞬吹き出し、ようやく掛かったディーゼルエンジンが、特有のガラガラといったノッキング音を打ち鳴らす。

「ウワサには聞いてましたが、本当にディーゼルなんですね」

「良うわかったな」

「そりや、この音聴けばわかりますよ」

ディーゼルエンジンはガソリンエンジンよりも馬力も出ないし回転速度も上限が低い、しかし、低回転から中回転までの広い範囲で、トルクを発揮できるの特性を持つのが最大の強みにして長所だ。そして、排気圧が高い故に排気タービン（ターボ）との相

性が良く、それと制御機構を組み込めば相当の性能を発揮できる特性を持つ。故にどんな道もどんな坂も走破できると確信する。

「これでどこへでも行けますね！」

「泥濘地以外はな」

「ふふ、満足したんで、ご飯にしましょう！冷めちやいますよ？」

「ホンマに優柔不断なやつちやのう」

「何をいまさら〜」

「別に褒めとらん」

「ほらほら早くして下さい」

「分かった分かった」

そう、さやかに急かされるままに、軍馬のキーを抜いて、勝手口から家にかかる。さやかなのココロと鈴の様に笑う、その声が鼓膜を優しく撫でる。それが撫子と過ごした懐かしき日々を思い出させてくれる。もしここに撫子や爺様が居たなら。どれ程良かっただろうか？そんな事を思わずには居られなかった。

本栖湖の畔

GWも終わり、人が疎らになつて静けさを取り戻したある昼下がりの事。長い長い上り坂をキャンプ道具を括り付けた自転車で、息を切らして登る一人の少女の姿があつた。

少女は上り坂の終端の薄暗いトンネルを抜け、開けた視界に捉えた富士山に感嘆の声を上げる。

そして、直近にあるT字路を右折し、その先にある自分がキャンプという道に入った切っ掛けを作ってくれた場所へ足を進める。が、寝息を立てて眠る男の存在に気が付いた。

キャンプチェアにどかつと座り、足を組んで、寝息を立てているが余りに首が苦しそうだった。

少女は親切心に立ち寄り声を掛けようとした時、それが誰だか気が付いたのだ。

△ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

本栖湖の畔

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

駆ける相棒!!と馬の手綱を握り締め、重装弓騎兵古の日本に於ける日本独特の兵科で、全身に甲冑を纏った上に太刀を装備し、更には大型の馬上弓を装備した欲張り装備な騎兵が如く、浪漫の軍馬を駆けらせる。

その鉄の心臓は、ガララララ……と独特の音を打ち鳴らし。登攀であるにも関わらず、疲れ知らずだと主張せんとばかりに余裕の音を轟かせる。

長いワインディングロードを登り、トンネルを抜けると目の前に富士の山が見えて来た。

やったぜ。と心の内にガッツポーズを決めながら、直近のT字路を右折しその小綺麗なトイレの駐車場に軍馬を停めて、バキバキになった体を解して、用を足す。

「今日はよう見えるな」

独白しながら、軍馬の元に戻りながら腕時計を見る。

が、時間的にも余裕が有るし、ここには己しか居ない様なので、軍馬の傍らで椅子広げて暫く寛ごうかと考え。それが、途轍もなく甘美な案だと思ひ至る。

「こりやたまらんのう」

そんな言葉を呟きながら全身の神経を解してゆく。

暖かな春の日差しは温もりに、鶯の啼く声、雑多な鳥達の囀りに、風が草葉を撫でる音……上げれば切りが無いフィーリングサウンドが余りに心地良く、このまま融けて風

に流されてゆきたい……そんな欲望を懐きたくなる。

その玉響の後、意識はいつの間にか遠退いて、ああ、もうダメだと、手に掴んでいた玉が、スルリと指の合間を抜けて落ちるが如く、意識はコトリと落下した。

△▼△△▼△▼△▼△▼

長い長い坂を自転車に登るには、重力に打ち勝たねばならない。脚に力を込めてペダルを右左右左と回すが、漕げば漕ぐ程疲労感が蓄積する。しかし、わたしは確かに進んでいるという楽しさや、その疲れでさえ心地よかつたりするのだが。何より、その先でリンちゃん達とキャンプという、ご褒美が待ってるのだから頑張れる。

そんなこんなで、長い長い本栖みちを登り、トンネルを抜けると本栖湖の目の前に躍り出た。

綺麗に晴れた、群青の空やお陽様の輝き。そして、遠くに聳え立った富士山が、わたしの疲労感を吹き飛ばして、嬉しさに取り替えてくれる。

「ふおおお……」

本栖湖のキャンプ場に続く道のカーブにて写真を撮って、みんなが居るグループにあげる。みんな忙しいのか移動中なのか、反応はすぐには付かない。だけどその内付くだろうと思うと嬉しかった。

「ふおおお」

キャンプ場の管理棟に向かう道中の。トイレにて不思議な雰囲気のバイクが一台停まっていた。濃い緑色をして尚且それがつや消しで、荷物が一杯積んであつて如何にも重たそうな……

どうにもこうにも気になつて見に近づく。その隣で綿製の年季の入つたカーキ色のジャンパーに、これもまた年季入つた緑色のカーゴパンツを履いた全身緑で決めた男の人が、キャンプチェアに腕を組んで座つたまま眠つていた。しゃがんで顔を見上げた瞬間、その人が知つてる人だと分かつた。

「あ、恭介さんだ」

でも、なんでこんな所で寝ているのだろうか？そんな疑問を懐きながらも、本人を観察してみる。

首が余りに下を向いているせいか、聞こえるのは苦しそうな呼吸音だ。しかし、彼はそんな事はないと言わんばかりに気持ち良さそうに眠っている。

「ううううん」

と唸つたと思つたら、今度は首が仰向くが、喉が突つ張る程で、さつきよりもとても苦しそうだ。

「寝違えちやいますよう」

親切心で起こそうと思つて、肩を優しく叩く。すると恭介は呟いた。

「撫子お……わしや、おきとお……ど……ど……」

まさか起きてるのか？

ほつぺた突いたりして確認したものの、起きている様子は無い……只の寝言だ……しかし、なんでわたしの名前が寝言で出てくるのか。不思議でしようがない。

「もう、恭介さんおきてくださいよう」

「んう……」

「むう……」

恭介は頑なに目を開かない。

ならば、ちよつと強引だけどと思いつつも息を吸い込み。

「きようすけさん!!」

大音声を発した刹那。彼は「うおおお!!」と慌てて目覚めたのが不運な事に、椅子ごと倒れ後頭部から地面へと向かう。

「あつ」

ゴツ!という鈍い音が響き、辺りに一瞬の沈黙が訪れる。

「いつてえ!!」

彼は頭を抱えてのたうちまわる。その様子にどうしよどうしよとあたふたする。やり過ぎたと反省するにも今はそれどころではない。

「あーいたよー……」

そう呟きながらゆっくり立ち上がる彼の姿を見て、怒られると覚悟を決めて身構えるが降ってきたのは拳でも怒号でもなかった。

△▼△▼△▼△▼△▼

急に大声で名前を呼びれて飛び起きて、視界一杯に広がった少女の顔に驚いて仰け反ったものだから、バランスを喪い倒れ行く。せめて頭を強打せぬように、顎を引くのが精一杯。固く組んだ腕は直ぐには解けてくれず、真つ当な受け身にもならない。が、何もせず強打する事だけは避けたかった。

それでも、幾分かの衝撃は背中であけたものの、それでも頭を打ち痛たみが走る。しかし、お陰で完全に目が醒めた。その点は感謝しよう。

さて、犯人は誰だ？と痛みのせいで細く絞った瞼の先に、桃色の長く綺麗な髪をポニーテールに纏めた少女が立っていた。半袖のジャケットにデニムのホットパンツと言った出で立ちだ。そして、そして、目の焦点が合致したところで、その少女がなでしこだったと気が付いた。

どうしよう、どうしようと、おどおどしているので彼女がやったに違いはないが、己もそんな事で感情的に怒るのは論外だとわかっているので怒らないし、完全に不可抗力であろうから、怒る気にすらなれない。

また再会できた事に一抹の喜びを覚えるも、それを言う前に落ち着かせてやるのが先決だとして立ち上がる。怒られるか、しばかれるのかと思つた彼女は頭を抑えて身構えるが、此方としては恐怖心を与えるつもりなんて更々ないし、不本意である事を示したい。

「……大丈夫じゃやえ、安心しいさんせ……それにわしや怒つとらん」

なでしこはそう言われるとゆつくり頭を守ろうとした腕を解いてこちらの目を申し訳無さそうに見つめる。なんかいい、言葉はないものかと言葉を紡ぐ。

「まあ……ありや強烈な目覚ましじゃつた。じゃけど、他人にはせんことど。ええな？」

人を“叱る”と言うのは、感情的に“怒る”のではなく、論理的に諭す事を指す。それも爺様と撫子の受け売りだが、今やものになつて考え方だ。そして、それは正鵠を射ていると常々思う。

「ごめんなさい」

なでしこは深々と頭を下げる。素直で良い子だ。

「素直でよろしい……で、また君に会うとはな」

「そうですね」

なでしこは普段どおりの表情を取り戻していた。俺が怒らない事で安心したので

あろう。ならば、よかった、よかったと内心思いながら話を進める。

「どうやらなでしこは、今日ここのキャンプ場で友達らと泊まるつもりらしいが、如何せん己も行き先は同じ……故に、今回は行き先変えるべきな気がしたのだが……」

「じゃあ！わたしたちと一緒にキャンプしましょうよ!!」

等と純粹無垢で期待に満ち溢れた瞳で言うものだから。それを断るのは流石に気が引けて、俺が折れる形で落ち着いた。断ろうものなら、己の良心が複雑骨折しそうだったというもあるが……

にしても、この娘にひどく気に入られてしまったものだ……と、思う。

無論、信用できる人に気に入られるのは嫌いじゃないし、寧ろ好ましい事に変わりはない。しかし、相手は妹或いは、子分扱いできて、お互いの信用に於いて多少なりとも粗雑に扱えるアイツさやかとは訳が違う、本当に他人様の娘だ……その点わきまえて気を付けねばなるまい。そして、前回この娘に指摘された事を踏まえて、身の振り方を本気で考えなければならぬだろう……誉れあるスカウトとして、或いは大人の男として……

そう思いながらシートバックを弄り、外郎ここでは山口外郎を指すを取り出してなでしこに与えてみた。そんな事をするというのは俺自身も彼女の事をひどく気に入ってしまったからでもある。それに、次会ったらと、餞別のつもりで持ってきた物もあるが、行き先同じならキャンプ場の中で渡すのが最も良いだろうと思うのだ。

「もちもちしてて、美味しいですー」

満足そうに、旨そうに、微笑みながら、もちやもちやと食べるまでこの姿は、小動物の様な可愛らしさがあり、彼女の持つ魅力が光り輝いていた。自身としてもそれは眼福に他ならなかった。

「流石に寢床は離さねばなるまいけえ、儂は向こうに設営するけえな」

「りよーかいです!!」

受付を済ませた後の事、互いに別れて入り口から遠く離れた位置に移動して陣取が、湖面に面する位置の土壌は砂ではなくそれなりに締まった土であった。

ここを野営地とする。

心の中でそう宣言し軍馬から降車、シートバックの中に入れていたタープとポールを地面に放り、さて今日はどうしてやろうかと考える。この気温は平野部と比して五度程低いが、この時期であれば、夜間に氷点下に至る事は稀だろう。予報でも今夜は六度と聞いているので問題はないだろうと判断する。何を考えているかと言うと、テントは広げず、コットとシユラフとシユラフカバーのみで寝ようと言うのだ。ほぼ野晒しである。勿論理由はある。片付けが非常に楽なのだ。

意思決定が済むと長方形のタープの対角一点のハトメに、基準となる一二〇〇ミリ程

度の長さにしたポールの先端を挿し込んで、分厚く重い綿でできたタープ自体の自重を以て自立させる。そしたら隙かさず、自立させる為の基準となるもう一端のポールの張り綱と大体対角になるであろう位置にペグを打って既に立っているポールに掛ける。次にタープの対となる位置に、ポールを九〇〇ミリの物を使いつつ同じ様に張れば、タープは本当の意味で自立する。

して、張り終えたタープは、伸びた一对の段差のあるメインポールによって山側に向かって傾斜し、山側のタープのハトメに、直に通されたペグによってに地面に縫い付けられ。湖側は九〇〇ミリ長のポールを綱一本で張っている状態とした。何故その様にしたかと言えば夜間の風向きを考えた結果である。

夜間は快晴らしく、放射冷却によって空気が冷える事が予想される。だが、湖の水は気温よりも温度が高い為に、背後の山と湖とで温度差が産まれ、山の方に下降気流が、湖側に上昇気流が生じる。よって、冷たい空気が山から押し寄せるのは明白だ。尚且風上に対して、傾斜の掛かった部分の投影面積を増す事によって風防効果を持たせてあるのだ。

「フシー」

ふと、なでしこの方を見るとそれなりに慣れた手付きでテントを組み立てており、尚且入り口は教えてもないのに湖面側に向けているのが見える。

が、その理由は恐らく、景色が見える様にか、寝たい時にすぐに入れる様にと考えての事だろう。それも理に適つてゐる以上、俺からは何も言うことはない。

なでしこは俺が手を止めて、眺めている事に気が付いたのか、彼女ははにかむ様に笑う。俺も釣られて表情が緩んだ気がする。が、若しかしたら俺も笑つてるのかも知れないと思ひながら、手を降つて返事を返す。彼女もぶんぶんと勢い良く手を降るが、丸で犬の尻尾の様で愉快だったものの。刹那、手に握りしめていた、ペグらしきものが数本手からすつぽ抜けて飛んで行くのが見え、なでしこはそれに気が付いて慌てふためきだした。

「あーあー」

笑いながら探してやろうと腰を上げたが、その時の顔はかつての様に笑えてたのかも知れない。

一匹狼と五匹の仔犬達

なでしこの手からすつ飛んで行ったペグを草むらから探し出して、それを彼女に渡しながら小言をほんの数言述べた所で、この子に会ったら渡す物あったんだなと思ひ出した。故にそれに関連する提言を彼女に投げ掛ける。

「お前さん、設営終わったら薪拾いに行かんか？」

なでしこはそれをひまわりの様な満面の笑みで快諾する。その彼女の笑みは本当に可愛らしい。

「良いものだな……」となでしこに聞かれない様にして呟きながら、自分のサイトに戻り、その先で軍馬の荷台の中から鉈やら袋がぶら下がった、安全帯の様な様相のベルトを腰に巻くが、それは安全帯と呼ばれる物に似ている物だ。このベルトには多種多様なアイテムが収まつてるので様々な事に対応できる。無論今からする事にも。準備できた所でなでしこに声を掛ける。

「おーい、準備ええかー？」

「はーい」

なでしこが追いつくのを待ってから、薪を拾える場所に歩を勧めた。

薪拾い出来る場所に着いて思った事がある。落ちてゐる杉の間伐材や打った枝の様なとか樗の系統の薪が”バラ撒かれてゐる”のだ。そんな事はあるのか？何処かの阿呆が散らかしたあとではないか？と疑つた。

「えらいちらぼうとるが。これがそか？」

なでしこに訪ねると彼女は、あー……と苦笑いしながらこう告げた。

「ここはいつもこんな感じなんですよ。多分ですけど、管理人さんがここに撒いてらつしやるのかなあつて……」

刹那、数十メートルは離れた雑木ががざりと動くのが見えた。よくよく見れば、青いメガネのレンズコーティングの反射も微かに伺える。それで察した。なる程など。

「ほう……随分と気前が良いのう……気に入つた」

「ふふ、わたしもここはお気に入りの場所なんですよ！」

「……君は確かここでキャンプに興味を持つたと言つてたな」

「そうです！憶えてくれてたんですね！」

キラキラしてとても嬉しそうな瞳を向けられる。

「まあ、わしや他人との関わりがないけえ、よう憶えとつたんかも知れんのう」

本当はこの娘の事を気に入つてゐるから憶えてただけだが、そんな事はそう安々とはい

えない。男とはそういう物だと爺様から習ったからだ。真の男とは寡黙にして、聞かれた事が必要な事しか言わんのが美德であると。

「そう言えば、恭介さんってお友達とキャンプされたりはしないんですか？」

「……儂に生きとる友が居ればな」

「えっ、それは……？」

これは迂闊だった。

「何でもねえ……忘れてくれ。それより薪拾わにやならんのじやろ？」

「あ、はい！」

深く深く嘆息して作業を始めた。油断は大敵だ。

拾った樗の薪をロープで縛って一纏めにしたのを二つ運ぶ俺の後ろを、杉の薪と松ぼっくりを抱えたなでしこが続く。

「ふおおお……」

「どねいかしたね？」

「いいえ、やっぱり男の人だけあって、凄い力だなあって」

「あー……」

さっきの話だが、彼女がどうしても片方は抱えたいと言うのでさせてみたところ、め

ちやくちや持ち上げるのに四苦八苦していた。故に抱えんでええと、止めさせた。良く考えてみれば、片方だけで少なくとも二〇キロ以上はあるし、無理もなろうと思うのだ（女子おなごだし）

「わしやあ、物心ついた頃から爺様に付いて風呂炊くのを手伝ったりとかしてきたし……慣れとるけえね」

「お風呂、薪だったんですか?!」

なでしこは目を白黒させて驚く。

「まあ、儂が高校上がるまでの間じゃがな」

テントサイトに着き、ドスンと両手に持った束をおろす。

「ナタ、ナタって、あ」

なでしこは荷物を漁って、この前持ってた腰鉈を探している様だが、忘れてらしい。

「リンちゃんに返したの忘れてたよ」

えへへ、と笑ってごまかす。まあ、それなら俺にとっては好都合な訳で。

「そうかい、んじやコイツをお前さんにやろう」

ダンプポーチから無造作にそれを掴んで手渡す。山程余った時間の有効活用と趣味と実益を兼ねた自慢の一品だ。とくと味わうと良い。

「これって、もしかして?!」

パーと花開く、言うなら打ち上げ花火の様ななでしこの表情に期待通りの反応だと内心ほくそ笑む。革の鞆から刃を抜けば、優美な水面の波紋の様な紋様が浮き上がった刃が白日の元に現れる。思わず彼女は「きれい……」とただ一言漏らす。その彼女の澄んだ双眸はとても美しい。

「氣に入つて貰えた様で良かったよ」

その一言にはたと現実引き戻されたなでしこはとても心配そうな顔になる。故にこう思つたのであろう。本当にこれを貰つても良いのか、と。

「ほ、ほほ、ほんとうにわたしが貰つてもいいんですかっ！」
やっぱりそうだ。

「儂がやる言うた以上、そねいなことは心配せんでええ。それに男に二言は無いけえのう」

俺はそう嘯く。まあ、俺としては目には目を齒には齒を、と言つた。言い換えれば、善には善を、悪意には悪意をと言つた思想の一貫の一つでもある。実際彼女を物理的に助けたのは俺であるが、その結果。心を助けられたのは俺なのだ。故に当然の行いであると信じて疑わない。

「ありがとうございますっ！この鉈は一生大事にします!!」

「君の一生とまでは保たんしやろうけど、駄目になるまでコキつこうてくれたら、わ

しゃ嬉しい」

「はー!!」

こうして、俺は顧客一号を手に入れたのであった。

それはさておき、俺は期待しているのだ。彼女ならちゃんと使ってくれと。ソイツで自らの道を切り拓いて行ってくれと。

「おーい、なでしこー」

そんな声が聞こえたのは、粗方薪割りが終わった頃合いであった。

「リンちゃん!!おつかれさま」

なでしこは剣鉈を鞘に納めてそれを置いて声の主に駆け寄る。その姿に、友が居ると言うのは本当に良いものだ。と強く思うのだ。

俺は止めた手を再開し、薪を一纏めに集めておく。一仕事一片付は作業効率向上の基本だからだ。そんな事をしていた所で声を掛けられる。

「恭介さん!ちよつと宜しいですかっ!」

「ああ、構わんぞ」

なでしこに声を掛けられ立ち上がる。

「リンちゃん!紹介するね!この人がこの前、凍えかけてたわたしを助けてくれた國

守恭介さんだよっ！」

なでしこより一回り小さくて、長くて綺麗な藍色の髪の毛の娘と対峙した。その双眸は綺麗な紫色をしていた。

「改めまして、僕は國守恭介と言う者です。宜しくお願いします」

そう頭を下げるが、よいよ思えば、随分と硬い自己紹介だったなと微妙な気分になる。

「ええと私は……志摩 リンと言います。宜しくお願いします」

志摩さんという娘は、少々おっかなびつくり到自己紹介をした。まあ、仕方ないだろうと苦笑い。

「すまんね。悪人面で」

「あ、いいえ！こちらこそすみません！」

「大丈夫だよリンちゃん、恭介さんはお顔が少し怖いけど優しい人だから！」

なでしこはフンスと何故か胸を張る。なぜお前が胸を張るんだ？とツツコみたくなくなる。

が、それよかせつかく彼女が作ってくれた突破口だと、呵々大笑して。

「そう思うてもろえとるだけ、ありがたいのう」

感謝を述べた。すると志摩さんも少し笑っていた。

その暫くの後の事。二人がテントを立ててるのを尻目に見ながら、俺は彼女らの為に

ケロシンストープで湯を沸かしていた。

「おー！ いたいた！ おーい！ リーンー、なでしこー！」

声が出たので振り向けば、新たに三人増えていた。囲まれたら面倒だと思いながら、眼の前に向き直る。

「あきちやーん！ あおいちやーん！ えなちやーん！ おつかれさまー！」

なでしこは大腕振って駆けて行く。元気なやつだなあと思いつつ俺はその様子を眺めていた。

△▼△▼△▼△▼△▼

私、大垣は犬子と斉藤を引き連れ、各務原隊員と志摩隊員の待つキャンプ場へと向かっていた。そこで私は、あの人物と出会すとは夢にも見てなかった。

あの人物とは、各務原隊員から報告のあった人物で、その容姿は、端正な顔付きでありながら鷹とも狼とも形容できるその片眸と左眼を覆う眼帯が特徴を持つ若い男性。そして眼帯をしているという事が私の「厨二心」を揺さぶった。そして途轍もなく機知に富んで優しい人物だと聞き及んでいるだけに、会いたいとも思っていた。

だが、その彼が私の眼前に居るのだ。故に私は感激した。今是非ともお声掛けしたいと、歩を進め。

「いんこちはー！」

私としてはめちやくちやスムーズに声掛けできたと思う。
が、彼が返答してくる迄の数句の時が、凄く長く感じ喉が渇く。

「こんにちは」

おお!!挨拶返してもらえた!!てか、声低つく!!これだけで感無量と内心絶叫しながら、次は何の話をしようか……しようか?……アレ?ワスレタ……ワタシハイッタイ
……

△▼△▼△▼△▼△▼

「あきく、あきく、何しよるん?」

緩い関西訛りとも取れる口調の娘が、フリーズしてしまったメガネの娘に寄る。

「こりやあかんわく。かともうとる。すいませんねえ」

「あ、ああ……」

何なんだ……この状況は……と困惑しながら己の置かれた状況を把握しようとする。

「あ、この人、なでしこちゃんと言ってた人じゃん、こんにちは」

「こんにちは」

関西弁の娘に訊ねられた。

「お兄さん今何してはるんですか?」

そりゃあ……見てのとおりなのだが……

「見て分かん者は……いや、あの子らん為に湯沸かしとる……」

周りを一瞥する、フリーズした娘は兎に角、既に半包囲されているではないか……一対一なら兎も角、人数が多過ぎる。誰か助けてくれ……なでしこ助けてくれと目線を送りつつ、瞬きで……^s——^o……^sとモールス信号にて救援を要請するも、伝わる訳がなく。斯くして天を仰いだ。

「——という訳で〜」

なでしこの介入によって助けられた俺は、ホツと一息嘆息した。マジで助かった……「すまん……わしや人付き合いは苦手でのう……」

「私達こそスママセンでした」

メガネの娘が頭を下げた。曰く「野クル」なるサークルの部長との事だ。

「いや、ええよ。道中捉まった時に誘いを断りきれんかった儂の咎じゃし」

いい加減謝罪フェーズも辞めねばなるまい。

「まあ、この件についてはここまで。日が傾いて来たし、焚き火でも熾そうや」

「「「「はい」」」」

石で組んだ火床に、杉の系統で細割にした薪を並べて、いつもの様に麻綿で火をつけようと思った。が、今回はなでしこが松ぼっくり拾ってきてくれたなあ……と思い出

す。そして、その松ぼっくりに火を付けるべく、オイルライターを懐から取り出した所で、ある疑問が浮かんだ。外様の存在である儂がしていい事なのか？と。親指で蓋を弾いて開けて、蝶番側に親指の爪で弾いて蓋を閉じる一連の動作をした上で、手の中で一八〇度回して、なでしこに使えと差し出す。

「各務原、こりゃわしや外様じゃ。こりゃあお前さんらのキャンプ。外様である儂が一番美味しい所を持って行つては不味かろう？」

え、て言う表情のなでしこは「良いんですか？」と、問うてくる。

「無論」

首肯してなでしこにオイルライターを手渡す。すると彼女は真剣な面持ちで「では」と言つて、右手に持ったライターの蓋を左手で丁寧にかけて、スターターを回し火を灯す。彼女は「簡単に火が点くんですわね」とたんぼぼの様な微笑みを向けてくる。かわいい。

火の灯された松ぼっくりを火床の中心に置き、それを包む様に杉の薪を組む。暫く経てば、杉に火が移つてパキパキと爆ぜる音を飴させながら燃え始める。

なでしこが丁度風下に居るものだから、彼女は煙に巻かれながら「煙が目には沁みるよ」とむせながらに且つ、何故か嬉しそうにしている。志摩さんは「じゃあ風下に立つなよ」とこ尤も極まらないツツコミを刺す。「あんまり煙吸いよると喉焼けるぞ」と忠告

した所で立ち上がる。自己紹介タイムと言う訳だ。そして、このフェーズを終えねば前に進めないのでやるしかない。ここに居る以上、物言わぬ地蔵になる訳にはいかんのだ。

「さて諸君。儂は國守恭介と言う者であります。以後宜しくお願い申し上げます」

一礼すると「待ってました！」や「おお！」等の好意的な反応が返ってきた。俺としてもその受け取られようは想像してなかった。正直、今までの常識的には否定も非難もさもありなんと思っただけに。

ふと、なでしこの方を見ると、こうなると分かってきました。と言わんばかりにウインクしていた。君は結構やり手やも知れんな。と思いつながらに前に向き直る。

「儂が、各務原を助けた言うことで、儂は君らの中では既知の人物となつちよるじやろう。じゃけど、儂は君らの事は知らん。じゃけえ右端の子から教えてもらうてええか？」

すると一番右に座った、垂れ目の娘が立ち上がる。

「はい。ウチは犬山あおいつて言います。宜しくお願いしますー」

次はフリーズから開放されたメガネの娘。

「改めまして、私は野クルの部長をしております。大垣千明です。宜しく願います」

最後はショートヘアの娘から。

「私は齊藤恵那です。宜しくお願いまーす」

「改めて宜しくお願います」

すると改めて拍手と笑顔で迎えられ、何故にこの娘たちを警戒してたのかわからなくなつた。

昔の俺は、どこに行つても第一印象からして歓迎されることは無かつた。あの子が居てくれたから、いや、あの子を救つたからこそ、あの子の信頼の上で歓迎されてるのだから、と、こんなに温いとはなあ……

嗚呼畜生、わしや嬉しい……なあ、撫子聞いてくれるか？ 儂は孤独ひとりじゃなかつたんだな……

火の傍

富士の映える湖畔にて五人の娘の声が訝する。

現在その五人の娘の話題の俎上に一人の男が乗せられている。

その男は端正な顔付きに、冷厳さを漂わせる目付きをした隻眼の男である。

「國守さんってどんな人なん?」、と犬山あおいは件の男が席を外している間に各務原なでしこに訊ねた。

するとなでしこは「優しくて、格好良くて、ご飯を炊くのがとても上手な人だよ!あとキャンプ歴は十年以上だって!」と彼を褒め称える。

「へえ、つまるところ超絶イケメン野クルの尺度で言う、色々な技能を持った、イケてる男性キャンプパーヤン」とあおいは感心し、外連味な笑みの下……悪く無いかもと皮算用。

大垣千明はいい事を思いついたと思わんばかりに、いたずらつ子な表情を浮かべる。

「じゃあさ! 今日ご飯炊いてくださいって、頼んでみようぜ!」

「お、いいね!」「おお! ええやん!」と斉藤恵那とあおいは同調。

しかし、常識人として志摩リンは、釘を刺さねば気が済まない。

「お前ら、イイカゲンニシロヨ。今日会ったばつかの人に流石にそれを頼むのはマズイだろ?」

千明は、大丈夫だろ、と笑い。リンは訝しむ様に千明の双眸を見つめる。

「チ、チ、チ、それは甘いな志摩君」

「は?」

お前は何を言ってるんだ?、と訝しむリンの前に、千明は急に真顔になると、顔の前で手を組み、声を低くして男口調で語り出す。

「世の中一期一会と言うし、折角スペシャリストに出会えたんだ。この機会を逃すのは惜しいと思わないのかい?」

リンは青天の霹靂とも言える衝撃を受けた。それも一理あると。

嘗てリンは、炊飯を失敗して以来、今まで炊飯して来なかったのが、これを機に自分も出来るように……と言う欲が刺激される。

それが為にリンは、くっ! 確かに……、と苦虫をダース単位で嘔み潰した様な顔で呻く。

分かってくれたか?と千明は呟く。

「他に意見は?」と訊ねるが。

「賛成ですつ!」「さんせい」「お、おう」等と全会一致であった。

その案を手に千明は、トイレから帰って来るであろう恭介と合流すべく踵を返えそうとした刹那、視界一杯に緑が広がった。

え？と思いい顔を上げれば、腕を組んだ当人こと恭介が睥睨する様な眼差しを千明に向け、密談は決まったかいね？、と直截に問う。

恭介は話を聴いていた上、気配を消し待っていたのだ。

真後ろに本人が居るなんて思いもしなかった千明は、アワ、アワワワワ、と那由多の先へと意識を放り投げてしまう。さっきまでの男気口調は何処へやら。

「そうならそう、と直接言ってくれりゃーよかつたものを……」

恭介は脅かすつもりは無かつたんだがなあ、と深く深く嘆息した。

恭介は余っていた自身のタープ用ポールと麻紐を用いてトライポッドを拵え。

焚き火の周りに石を積み、熱が反射される様にした竈を組む。

そして、恭介がそれを終えた頃合いに、彼の助手兼弟子として指名されたなでしこが、追加分の薪を両手に抱えて戻る。

「戻りましたっ！」

なでしこの元気いっぱいな声を受けた恭介は彼女を一瞥するなり、次は何をするかわかつたらうな？と訊ねる。

「薪割りですなっ！」

楽しそうに微笑むなでしこに、恭介は、真つ二つに折るぐらいで良い、と釘を刺した上で要求を一つ。

「手持ちの中で一番丈夫そうなのを一つくれんか？」

なでしこはなんで？と首を傾げながらも、やたらと太い薪を差し出す。

「……」

恭介は、儂の訪ね方が悪かった、とした上で、四纏弱のやつが欲しい、と要求を改める。

するとなでしこは、わかりました、と丁度良さげなのを選び、恭介に手渡した。

そこでなでしこが問う、何に使うの？と。

「これは、ダッチオーブンを吊るす仕掛けにする」

「仕掛けとは？」

「S字フックみたいなもんと思ってくれやー良い」

囲炉裏の上に鍋吊るすやつみたいにと。

「なるほどっ！ それをトライポッドに引っ掛けるんですねー！」

はえー、となでしこが見つめる先で、恭介は手慣れた手付きで事を成す。

なでしこは、物が出来上がっていく様子を眺めるのは楽しいらしく、彼女は他の娘ら

を集めるべく声を張る。するとどこからか！今行くくと声がして、娘たちがぞろぞろと集まりギヤラリーを形成した。

恭介は思う。晩飯は割と手間の掛からん物なのだろうと。(いや、当然か)

そんな事を考えながらも、恭介は黙々と鋸を引いて薪を切り。レ点となる部分の薪どうしがキツチリ噛み合う様に、鋸と肥後守で切り欠きを作り合わせる。

そしたらその部分を麻紐で筋交い縛りにして、キツチリと固定すれば完成だ。

「國守さんはブッシュクラフターか……」

恭介の慣れを感じさせる手捌きを見たリンは、なるほど関心と言った具合に納得する。

「まあ、物が無ければ作れば良いの精神で、いつものやりよるけえな」

恭介のその言葉に、この男はやはり只者ではないな、と野クルの面々は感じ取る。

「ほれ、これでどねいなもんじゃろうか」

程なくして完成したフックは、トライポッドに掛けた上で、千明が試しに、と荷重を掛けても壊れる様な様子は無く、十分役目は満たすであろうと安心させる出来だった。

米を研いで給水させるまでの間、特に干渉する必要も無いと判断した恭介はひたすらに焚き火の前で時間を潰していた。

が、異様な光景が近くで繰り広げられており、二度見する事になる。

それはと言う、とキャツキャ言いながら大量の薪を針金で束ねると言った怪しげな行動をする千明とあおいの姿があった。

恭介は思う、まさか持って帰るつもりなのか？と。

だが、どうやって？

「……」

傍らのなでしこに、直截に訊ねる。

あの娘らは一体何をするつもりなのか？と。

「あー……あれは、スウエーデントーチを作ろうとしてるんですよ」

「スウエーデントーチ？」

「木こりのろうそくとも言われます」

「樵の蠟燭……」

恭介の腕は確かに、十年以上のキャリアを積んだベテランそのものである。

しかしである。この男、哀しいかな、実用的なものにしか触れてこなかったのである。

何故なら、興味もなかったし、その様に育てられたからだ。

「世の中知らん事があるものだな……」

なでしこはきよとんとした瞳を恭介に向け、小首を傾げる。

「恭介さんでも知らない事があるんですか？」

恭介は、ははは、と笑う。

「儂とて全知全能じゃなぞ？ 神じゃあるまいし」

なでしこは、確かにそうか、と首肯し笑った。

暫く樵の蠟燭なるものを作る、千明とあおいの動きを観察していたが、巻くのに少し手間取っている様に見て取れた。

それ故恭介は、針金の巻き方について物申したくなってきた。

……と云うのも前職の職業病みたいなものだが。

腰を上げ、二人に近づくと一言。

「針金巻くのに難儀ととるようじゃが、上手いやり方があるちゅうたら知りたいか？ 要らないと言われたら退散するつもりである。

その投げ掛けに千明は目を白黒させて……そんなやり方があるんスカ？と恭介に問う。

恭介は、あるぞ、と薄く微笑む。

「さて、針金で縛つてもイマイチ緩くて持ち上げたら抜けたりするのは何でだと思っ
か？」

「針金を縛る力が足りてないからだと思えます！」

千明は即答する。

恭介は、解つてゐるじゃないか、と確認すると話を続けた。

「しかし、人間の素の力で完全に縛り付けるのは無理じゃ。よつて梃子の原理を使う」

「梃子……ですか？」

「ああ、梃子じゃ」

恭介は千明から針金を受け取る、と近くで見つけた一糶程の太さの落枝を手に、二つ折りにした針金を一周、樵の蠟燭とする薪束に巻き付け右に捻る。

そして、その巻目の上に枝を置いてその上で左巻きの巻目を作り、枝を時計回りにグルグル回せば、薪束側の巻き目がグルグルと巻かれて行き、キリキリと音を立てた。

「し、締まつてる！すげえ!!」

縛り上げた薪束をひよいと持ち上げ、上下に振りながらに恭介は、じやろうがや、と微笑む。

「じゃあ、後はお前さんらがやりさんせ」

恭介は踵を返して手を降つて、自分の椅子のある方へと帰つて行こうとする。

それを追い縋る様に千明が恭介の手を握る、ともう一度教えて下さい！、と頼み込んでいた。

流石に一回見せただけじゃ解らなかつたらしい、と恭介は嘆息し、わかつた、と朗らかに応じていた。

日が傾いで富士が紅く染まる頃、炊飯組と樵の蠟燭を用いる土鍋組は双方仕事を始めていた。

方や火鉢を聴診棒にダッチオーブンの音を聴き、方や土鍋に材料を投入して芳しい香料の香りを漂わせ食欲を誘った。

その香に恭介は、失敗は許されんな、と神経を尖らせ、目の前のダッチオーブンの音を、なでしこ共々耳を傾ける。

暫くして、もうじき吹こうかと言ったところまでしこが、あつ、と何かを思い出したかの様に声を発す。

「恭介さん、さつきご飯を炊く前に何を入れたんですか？」

恭介は、あーあれか、と微笑んだ。

—数分前—

恭介はダッチオーブンを運んできたまでしこからそれを受け取ると、徐ろに蓋を開けて水量を指の関節の長さを用いて測った。

「水はええじゃろう」

なでしこは良かったと微笑む。

すると恭介は足元に置いていた小さなボトルを手にすると、親指でフタを弾いて、トポトポと注ぎ、まあ、こんなもんで良からう、と呟いた。

なでしこは恭介に今何をしたのか訊く間もなく、彼はそそくさとダッチオーブンの蓋を閉めて火に掛けてしまったのだ。

「アレは亜麻仁油だよ」

「亜麻仁油？」

なでしこは首を傾ぎ、顎を擦る。

しかし、答えは出ず。「教えて下さいっ！」となでしこは降参する。

恭介は、ははは、と笑いながらに、それを語る。

「炊く時に油を入れて置くと、粒が立ったパラパラとした、インディカ米の様な飯になる」

なでしこはほうほう！とその双眸を爛々と輝かせいつの間にやらメモ帳を手に真剣に聴いている。

「んで、コクが加味され、単体であっても旨い飯になる。そして、オカズの旨さをより一層引き立てさせる存在へと、昇華してくれるんじゃない!!」

なでしこに電流走る。

「な、なんですとっ!? 恭介さんのご飯が更に美味しくなって、わたしたちの胃袋を驚掴みにしてしまおうとなっ?!」

恭介は、ああ、と満足そうに呟くと更に一言添える。

「それとな、米は一度に大量に炊けば炊くほど旨くなる」
 なでしこの脳内では以下の様な方程式が成り立つ。

$KG \cdot Oa \times n + Kr \parallel$ 究極に美味しいカレー $KG \parallel$ 恭介さんが炊いたご飯 Oa
 \parallel 亜麻仁油 $n \parallel$ ご飯の量 $Kr \parallel$ カレー と。

「きよ、恭介さん以外のご飯食べれなくなっちゃたら、どうしよう……」
 等と大真面目に悩むなでしこ。

一方で恭介は大笑する。

「安心しいさんせーや。またどこかで会ったら食わしちやるし、なんなら君はもう味を知ってしまった以上は、再現する事だつて出来る筈じゃ」

違うか? と恭介。

するとなでしこは、任せてください! と胸を打つ。

「よっしや! じゃあ次会う事がありやあ、是非ともその時は君の炊いた飯を戴きたいのう」

恭介としては冗談のつもりで言ったのだが、いざ口にした瞬間、期待という気持ち

芽生えていた。

なでしこはそんな恭介の内情の変化に気付く事もなく、その時はお誘いします、と微笑んでいた。

恭介は心中に吐露する。期待……か……と。

吹きこぼれは低調になってからの、二分弱の後。

蓋の端から湯気と共に溢れる。どこか甘く芳ばしい香りが鼻孔をくすぐった。それだけでも旨い飯だとわかるほどに。

「お前さん。形の残ってる薪は、全部手前側に抜き出せ」

「はいー」

なでしこの澆漑とした返事が笈し、恭介に言われた事を実行に移す。

そして竈の外に取り出された薪は、燃焼に必要な炭化水素ガスを生じる程の熱量を急速に失い、纏っていた炎は消え、白煙が立ち上る。

「あんなに強く燃えてたのに、こんなに簡単に消えちゃうんだ……」

なでしこは炎の消えた薪をどこか口惜しそうに見つめる。

「まあ、薪にせよ燃料にせよ、所詮は熱で気化したガス分が燃えとるだけじゃけえのう」

そうなんですか?とまでしこ。そうじゃ、と恭介。

「ちゆうても、コイツらは後で竈の中に戻せば良い」

まだ使える、と恭介は付け加える。

「蒸らしが終わったら、戻すんですね」

「そうじゃ」

なでしこはへえーと声を漏らしながら、メモ帳に何事かを記した。

「あ、蒸らしの時間は?」

「三分弱ぐらいかのう」

「三分位ですか……」

なでしこは、なんとアバウトな、と心中呟くと同時。

初めて会った時も、この人は時間なんて測つてもなかつたし、直感だけでご飯炊いてたし、あのコンソメスープ?だって、調味料を量らずに入れてたなあと……。

「恭介さん。ご飯を炊く時間とか、お汁に入れる調味料の量とか、今まで計られたことは?」

恭介は微笑むと、ない、と即答した。

「ない?!」

驚きである。いやはや、普通は計るものだと思っただけに。

「二度にようけ大量とか一杯とかの意……いや大量に作る時にせよ。個人で食べる物を作るにせよ。一々計つてたら、時間なんぼ有つてもなーぞ足りないの意？」

「さ、流石に一番最初の頃は計つてたりは……」

「端からしとらんやつてないの意。君には信じられんじやろうが、儂を育てた爺様やBSの隊長BSⅡボーイスカウト 隊長Ⅱ大人の指導者から、計るんは無駄じゃ、となろうて習つての意わしや育つたけえな」

「てことは失敗は……」

「一々数えとらんが、それなりにある。じゃけど、やらかすたんびに、己自身でも考え、剩れ教えてくれさえもしたけえ、直感と経験でなんとでも出来る様になつとるんじゃ……まあ、人に物を教えるのも、感覚で教える他知らんという弊害もあるがのう」

「恭介さんは努力の人なんですな」

「人より場数踏んだだけじゃ」

「びびびび……と、アラームが鳴る。」

「あ、もう時間ですなっ！」

なでしこはスマホのタイマーを止めると、ダッチオーブンを下ろしに掛かる。

気を付けろよ、と恭介。

はいっ！、となでしこ。

蓋こそまだ開けてはいないが、その甘く芳しい香りは何よりも語っていたのである。

「カレーはもうすぐできるよ!」

炊飯組の様子を見に来た、カレー班の恵那はそう告げる。

「じゃあ、お皿並べて待ってるねっ!」

「うん! ありがとう!」

恵那は踵を返して帰っていく。

「カレー楽しみだなあ……」

なでしこはぐへへと涎を啜り、空腹を主張する様に腹の虫が……否、猛獣が唸る。

なでしこに目線を送る、と彼女は舌をぺろりと覗かせて、頬を赤らめていた。

「君に限るな」

恭介は微笑むと、君らしいと言う意味を込めて、その言葉をなでしこに贈る。

「えへへへ、これがわたしの専売特許ですから」

するとなでしこは、胸を張ってえっへん!と。

「良うわかってらっしゃる」

恭介はそう言う、と余りにおかしかったのか、吹き出してしまう。

それに釣られてなでしこまでが、腹を抱えて笑い出す。それは自分が言った言葉がツ

ボに入った様子だった。

「あーぐるしいー、フフオ！」

恭介は余りに久し振りにバカ笑いをしたものだから、息も絶え絶え。

「アハハハハ！恭介さん！その顔！」

なでしこは笑いながら苦しみ歪む恭介の表情が、ツボに入ったのかまた笑い出す。恭介は翌々理解する。何でもない事でこれだけ笑えるのは健全である証拠だなと。

「ハア……ハア……久し振りに、バカ笑いさせてもらうたのー」

「どういたしまして〜ふふ」

そしてその様子を見ていた面々は思うのである。この二人仲いいなあと。

そんな時である一台の軽四がやって来たのは。

あ、先生だ！と誰かが叫ぶ。

その軽四はサイト端に駐車。

そして、若い女性が降車し、一言。

「皆さん！遅れて、ごめんなさい！」

その女性は、長い黒髪を後ろで一つ紐で纏めており。また顔付きも端正であった。

野クルと名乗った面々は、お疲れさまです！等と、声を掛ける。

恭介は理解した、あの人が先生か、と。

しかし、はてと疑問が浮かぶ。別に遅れてきたからとかじゃ無い。何故か初めて会う

人じゃない気がする……。

その女性は部長から、何かしらの説明を受けると恭介に寄る。そして、目の前で足を止める。

「もしかして……國守君？」

恭介は、やっぱりそうか、と思いつつも。その女性が何者だったかまでは思い出せない。

「儂の事をご存知で？」

その女性は、はい、と答え、姿勢を正し。恭介に向かい三指礼。

恭介は反射的に立ち上がり、姿勢を正して答礼する。

恭介の敬礼は、國守恭介の威厳と風格を示すが如く、美しくも気高いものであった、と見た者は答える。

「やっぱり……」

女性は深呼吸。

「私は山梨派遣隊の、鳥羽美波と言います。憶えてらっしゃいますか？」
その言葉で恭介は思い出す。やっぱりかと。

懷古

私が漸く仕事を終えた頃には日も傾き初めていた。それにもう五月の後半と言うのに今日は何故か肌寒くて焚き火が恋しく思う。私がこうしてる間にも、一足も二足も先に本栖湖に向かった生徒達は晩の支度を始めているだろう。

「思ったより遅くなつてしまつたわね……」

そう零して空を仰ぐ。すると、吸い込まれそうな蒼が天頂に広がっていた。

△▲△▲

懷古

▲▲△▲

キャンプ場に着くと、テキパキと晩の支度をする生徒達の姿の他に、各務原さんと男性が何やら作業している光景を目にした。

一種ギョツとしたものの、その男性は丁寧に何かを教えている様だった。

車から降りて近付くと顔がより鮮明に見えた。その人は隻眼だ。そして、その声質は近頃の若い男性とは思えない程低く落ち着いた声質で、思わず惹かれてしまう。だけでも、一人称が年寄り臭く『儂』或いは崩して『わしゃ』で、送り言葉が『のう』とか『じゃ

けえ』と面白い喋り方をする。

美波はその人物に何処か心当たりがあった。十年前の朝霧高原で知り合った山口のスカウト、國守恭介にそっくりだと。しかし、確証はない……そこで美波は彼の左手を見る。彼ならば、人差し指の第二関節から先を喪っている筈。

男性の左手をよく見ると、確かに人差し指がその様になっていた。それで確信に至る。間違いなく、彼だと。美波は嬉しかった。こんな所で再会できるなんて思っても見なかったから。

「もしかして……國守君？」

顔を上げた彼の瞳は驚きつつも、訝しむ色をしていた。

「儂の事をご存知で？」

美波は改めて名を名乗らず『儂の事を』と尋ね返すあたりが彼らしいと思った。

「はいっ」

美波は彼に向けて返事とばかりに三指礼をして見せる。対する彼は中腰の姿勢からすくつと立ちあがると、流れる様に姿勢を正し答礼する。咄嗟のその所作は自分が知る誰よりも美しかった。もう違いないだろう。

「やっぱり」

嘆息して落ち着いてから、改めて自己紹介をする。

「私は山梨派遣隊の、鳥羽美波と言います。憶えてらっしゃいますか？」
國守君は数度頷いて「道理で何処かで会った気がした訳じゃ」と、半ば安堵した様に微笑んだ。

「え、ええ〜?!」

刹那、静かだった湖畔になでしこの驚嘆が飴した。

「どうしたーなでしこー」

それから、静かだった湖畔は少し賑やかになった。

「恭介さんって、センサーの知り合いだったんですねっ!」

恭介は「昔のな」と付け加える。

「カノジヨさんやったとか?」

あおいはの目は泳いでいた。

「それはn——」「ち、違いますよ! ええとその〜」

美波は恭介の言葉に被せなからに、顔を紅くして必死に否定する。しかし、説得力皆無の美波の表情である。

それを傍から眺める恵那は、國守さんとはもかく、先生は満更でもないってことかかと柔和に微笑み、リンはアンニユイな表情の裏「マジカヨ」と呟いた。

「待て待て待て待て。儂と鳥羽さんはそんな関係じゃな〜ど。ボーイスカウトの同胞じゃ」

美波は恭介の助け舟に縋る為に必死に頭を振る。しかし、未だに顔が紅いのが、付け入る隙というもの。

「へえ〜そうなんやな〜? にしてはセンサー、真っ赤な顔で言われると説得力がありません〜?」

「だ、だから! 違いますつてば!」

美波は叫ぶ。

「犬子、それまでだ」

千明があおいに軽くチョップをすると、あおいは目を泳がせながらに「せやな〜」と鳴いた。

「ねえみんな、今のは何の話だったの?」

純粹無垢少女、なでしこが皆に問う。

「よーし、お前らメシだ! メシ〜!」

一人置いてきぼりにされたなでしこは、目を点にして固まっていた。

「センサーと國守さんの再会。そして、中間テストお疲れ様! じゃ! カンパーイ!」

「「かんぱーい！」」

千明の音頭に合わせ、各々のコップをぶつけ合い、互いに言祝ぐ少女達。一方、その片隅で酒の入ったコップをぶつける二人の男女は何処か大人な雰囲気だ。

「「再会に」」

そして二人はコップを叩る。

「うむ……これは旨いな」

「ぶはあー！でしよ！でしよ〜！」

美波はもう一杯如何ですか？とお酌しようとするも、恭介は十分だと手で制す。

「酒は好きじゃが、わしゃそんなに強うはないし。責任ある者として、自制せねばならん……倫理的にな」

美波は恭介の言葉がグサグサと突き刺さった。今までの自分の行いを思うと、とても恥ずかしい事ばかりだと。

「うっ！」

「どうした？」

美波は自問する。

そう私も責任者……彼の言う通りだわ……駄目よ美波、我慢なさいと……

その様子を眺めていた娘たちは苦笑いだ。でも、今日は綺麗な鳥羽先生のまままで居て

くれそうだと期待しつつ。

「い、いえ！何でもありませんわ！」

「そうか……」

恭介はまあ良いかと流して、カレーライスを口に運ぶ。

飯は粒立ちが良く上品な甘みが口いっぱい広がる。少し遅れて鼻を突き抜ける、焦げの香ばしさが良いアクセントを効かせている。

カレーはどうやらポークカレー。口に含めば豚の出汁や玉ねぎの甘味が効いていて流石良く米に合うと思う。だが、ポークカレーの筈なのに、何処か鶏の風味が紛れていて、それが不思議ながら味を醸し出し美味であると判定する。

その背景で、娘たちは旨い旨いと各々感想を漏らしたり、黙々とスプーンで口に運んで味わっている。そして恭介もその一人だ。

夕暮れの湖畔は、実に穏やかで多幸的な雰囲気包まれていた。特に飯が好評の様で、米炊き命理に尽きると恭介は微笑した。なでしこにやり方は教えたし、今後に期待だなと思いつつ。

「ご飯美味しいですねっ！」

なでしこがきらきらとした双眸を恭介に向ける。

恭介は「そうだな」と短く答えた。

「そう言や、えらいご飯がパラパラしとるけどなんでやろ？」

「多分、油を入れたんじゃないかな？炊飯器にサラダ油を小さじ一杯ほど入れて炊くと、パラパラご飯になるって言うし」

「よくわかつたね！リンちゃん！」

「へえー、あれ本当だったんだ」

「じゃあなでしこ！次も頼むわ！」

「え?!次も綺麗に炊けるか分からないよ！」

「今日は國守さんが居てくれたしね。明日の朝もお願いしたら、付き合ってくれんじやないかな？」

そして娘たちの視線が恭介に集中する。恭介はもう逃げられない事を悟る。故に最後まで付き合つてやろうと決めた。

「わかつた。付き合おう」

「やつたー！じゃあ、なでしこちゃんをお願いしますねっ！」

なんか含みのある言い方だが……と恭介は思うも、まあ気の所為いかと流す。

「上手い飯に預からさしてもろうたけえ。そんぐらいは、しちやろう」

「「「「ありがとうございまーす」」」」

恭介はやれやれと嘆息する。だが、今日は何だかんだ楽しいと思えていた。明日の解

散まで、皆の兄貴分として可能な限り振る舞おうと。

「う、うう……」

「せ、先生！なんで泣いてるんですか！」

その裏で美波は泣いていた。

「ご飯が美味しすぎてえ〜！」

美波は。パク。パクと食べ進む。単純に旨いからと言うのもあるが、初めて恭介に会った時に彼が炊いた飯の味と重ねていて。酷くそれが懐かしく思えていたからだ。しかし、がつつき過ぎたが為に噎せていた。

「おいおい、誰も盗らんけえ、落ち着いて食べさせえーや」

恭介が美波のコップに茶を注ぐより先に、美波はコップを掴んでウイスキーのボトルを手を取った。そしてコップに注ぐと水の如くそれを呷った。恭介の「よせ！」と制止の声や、娘たちの「あ」と言う声が虚しく呟する。さよなら綺麗な鳥羽先生。娘たちは天を仰いだ。

美波は糸目だった双眸を三白眼に変え、その態度もお嬢様の様な上品なそれとは正反対となる。

「アンタも付き合いなさいよー！」

恭介は静止の為に伸ばした腕を強引に掴まれる。

「おい！どねいなつとるんじや!？」

恭介は思わず叫ぶ。が、恐慌状態なのは彼だけらしく、娘たちは苦笑いだ。

「先生……酒癖が悪いから……」

誰かがそう呟く。

美波は酒を波々注いだコップを恭介に「飲みない」と突きつける。

恭介はアルハラだ！と叫びたかった。だが、注がれた酒が勿体無いから付き合つてやる事にした。さらば我の倫理観。

別に致命的に弱い訳じゃない。だが、酔いが回れば籠棒に眠たくなるだろう。

「わかった、わかった。離してくれ」

漸く恭介は美波の腕から解放された。が、美波からコップを受け取るもすぐ飲めと煽るので、大人しく酒を呷った。

……しかし、旨い酒だ。だが、だが……旨い酒こそこんな飲み方は違うよな……と思わずにはいられなかった。

美波は一瓶の最後の一滴まで飲み切つて「びやあ、あ、あうまひい、いい……」等と呻ると、いびきを立てて夢の世界へと落ちて行つた。

「ええ……」

恭介は酷く困惑を覚えた。なんてやつだと。

「どうもウチらの先生がすみません」

美波の代わりにあおいが恭介に謝った。彼はとんでもないとした上で「酔っぱらいのする事じゃ。こんぐらいは許しちやろう」と慈しみのある瞳を美波に向け、彼女のズリ落ちたブランケットを掛け直してやった。

恭介は嘆息しながら自らの椅子に戻ると、もう一度嘆息した。段々とアルコールによつて焼きが廻りつつある事を自覚して。

「そう言えば。恭介さんって高校生の時、部活は何をされてたんですか？」
恭介はトロンとした目をなでしこに向けてつつ語り始めた。

「僕は電子工作同好会と言うのを立ち上げて、活動しちよつた」

「電子工作同好会？」

「ああ。主にパワーエレクトロニクス電力を変換する技術で、交直変換や直交変換や電圧や電流変調をする技術を指す……と言つてもわからんよな？」

「わかりませんっ！」

「そうじゃのお……なんちゅーべきかのう……」

恭介はどう説明して良いのか思い悩む。

「……IHヒーターってのはわかるか？」

「火を使わないコンロですよねっ！」

「その通りじゃ。んで、コイツが正にパワーエレクトロニクス分野の物でな。儂は鉄を融解……融かされる様な装置も作ってた」

恭介としてはもっと面白いであろう、コイルガン中空のコイルの手前に鉄心を置き、コイルに一瞬だけ電気を流す事で鉄心を吸引、そのままの加速度で射出する装置。恭介がかつて制作した物はコイルを4段使う多段コイルガンで、タングステン芯を持つ侵徹体を秒速370mで射出できるものだったが、装置が巨大でトランスの磁気共振音が煩く実用性は無かった。やレールガン極性の違う二本の電路(レール)に挟まれた導体に電気を流すとローレンツ力という進行方向の決まった力が生まれ、電気が流れる間加速し続ける。恭介が嘗て作った物は、樹脂製の装弾筒に包まれた鉄製の侵徹体を秒速1400mで射出する能力があったが、コイルガン以上に巨大で銃身命数が短く実用性がなかった。実用性とは言うが、実際に対人使用できるかと言う意味ではなく、これは研究資料であつて武器ではないという方便であるの話をしたかったが、それなりに殺傷能力があるものなので控える事とした。

「鉄が融ける?!」

「ああ、物の数十秒でな」

そう言えば昔、撫子からその時の映像貰ったなあと思ひ出した恭介。スマホのフォルダを弄り、実験の様子を撮影したそれを見せる事にした。言葉で語るよりかはわかりや

すいだろうとして。

動画が始まると、鉄紺色の学ランを身に付け、まだ両眼のある頃の恭介が映っている。表情は今の恭介と違って、明るく朗らかだ。

……当前だ。この頃はまだ希望があったのだから。

「これ恭介さん？」

「そうだよ」

「ふぉ〜」

動画の中の恭介は『撮つとんか？』と撮影者に訊ねる。撮影者は『きよつちゃん！バツチり撮れてるよ！』と答える。どうやら撮影者は恭介と親しい天真爛漫そうな少女の様だ。その声の主こそが、恭介の親友だった女……田原撫子その人だ。

『わかった。じゃあ始めるか』

『ど〜ぞ〜』

恭介は回路の収まった箱に取り付けられたMCCB配線用過電流遮断器のスイッチレバーを押し上げる。

MCCBはパチンと弾かれる様な音を立て、電源が投入された事を告げる。そして、それを示すかのように「ブーン」と低く唸るような音がし始める。これが所謂、磁気共振音という音だ。

回路の収まるアルミの箱の盤面には、今の電流を指示するアナログメーターと電源表示灯がある。

電源表示灯こそ赤く輝いているものの、電流計の指針は僅かに右に振れるのみで電流が殆ど流れていない事を示していた。

『これ動いてるの?』

『動いてるぞ。負荷がなけりや電流は殆ど流れん』

そして、恭介はコイルヒーターを素手で触る。この部分はむき出しの充電部だ。実際に出力電流が流れる。

『熱くないの? 感電しない?』

『原理的に火傷はせんし、電圧的にも低圧じゃから全身ずぶ濡れでも無い限りは問題ない。まあ、体内金属か指輪があるなら大火傷違いなしじゃがな』

恭介ははははと笑う。

『怖いなあ』

恭介は耐火レンガをヒーターコイル下部に置き、ヒーターコイルの中に坩堝をセットする。実験の準備は完了だ。

『じゃあ、実際に鉄融かすぞ』

『はい』

恭介は坩堝の中に鉄筋の断片を入れる。数秒の後、断片が赤へ黄色へと次第に色を変え、白く輝きながらどろりと坩堝の中へと落ちて行った。

恭介は電流計を一瞥し定格電流内に収まっているのか確認する。

そして、坩堝をプライヤウオーターポンププライヤーの事で掴んで持ち上げると、それが既に液体である事を確かめる様に揺らして見せた。

『おう、ほんとに融けてる！そして、まぶしい〜』

『そりゃ眩しかろうよ』

坩堝の中の鉄を揺らしながらに恭介は眩く。

『……電流調整回路組み込んで、溶融塩電解してえなあ……』

『溶融塩電解？』

『食塩……塩化ナトリウムを融解して、それに電極突っ込んで電気分解したらな。金属ナトリウムが得られるんだよ。……てか金属ナトリウムがわからんか？』

映像が縦に揺れる。

『金属ナトリウムはアルカリ土類金属と呼ばれる金属で、水にプチ込んだら面白い事になる金属じゃ』

恭介は不敵に微笑む。とても悪い事を考えてそうな顔だった。

『絶対ヤバイやつだ』

『大丈夫だ。問題ない』

恭介は満面の笑みでそう答える。

『ほんと？』

『ホントだとも』

『ところできよつちゃん』

『なん？』

『それで鉄融かせるのはわかったけど、用途あるの？』

『……』

恭介は顎を擦りながら逡巡する。

『ない』

『だよね、じゃあ！アルミ融かして鋳造してみようよ！』

『鋳造か……良かろう』

『やったあ！』

『で、何作るん？』

『猫のストラップ！』

『……わかった。機械科実習棟から鋳造用の砂と型やらパクってくるわ』

『じゃ！ウチはアルミ集めて来るね！』

『おう。怪我するなよ』

『はい』

映像はここまでだ。しかし、恭介は固まっていた。

何故なら酷い懐かしさに打ちひしがれていたからだ。二度と今の恭介に話し掛ける事の無いその声が、酷く懐かしくて寂しいのだ。故に動画が終わっても呆然としていた。

「恭介さん？」

なでしこは動かない恭介を見上げる。

声を掛けられ、流石に我に返った恭介は「いや、なんでもない……」と言葉を濁した。恭介は思った。やはりアルコールは危険だ。感情の制御が難しくなる。少しでも寂しいと思えば何倍にでも増幅してしまう……

恭介は負の感情を押し出さんと深く嘆息する。が、同時にどっと眠気が津波の様に押し寄せてきた。どうやら本格的に焼きが回ってきたらしい。

……もうどうでもいい。止めどない睡魔は蠱惑的だ。落ちるその瞬間はよもや絶頂と言っても過言では無い。しかし何度でも言う。やはりアルコールは危険だ……と……

「あ、寝ちゃった……」

恭介はすう……すう……と寢息を立てながらに、夢の国へと旅立った。このままではブランケットも何も持たない恭介が風邪を引いてしまいそうだと、不憫に思ったなでしこは、自身のブランケットを恭介に掛け、これでよしと微笑んだ。

「出たなママシ」

「ふ、ふ、ふ、この前みたいにリンちゃんが眠たくなっても、わたしがついてるから、だいじょうぶだよ」

「やめろ」

「あれこの前、悪くなかったって言ってたよね」

「さっ、斎藤!」

「そうなの?!」

「へえそくなんや」

「お、おい!」

四面楚歌なリンの肩を千明が叩く。「私も居るぜ」等とイケボでリンの耳元で嘯くも「オマエはネエヨ」と一蹴。

千明は「だめか」と笑い、それに釣られる様に娘たちもはははと笑った。焚き火が照した静かな湖畔に飴するのは、楽しげな笑い声だった。

月光に包まれて

△▲▲△▲▲△▲▲△▲

月光に包まれて

▲△▲△▲△▲△▲△▲

「……」

あれから幾時間経ったか分からないものの、目が醒めた。随分と懐かしい記憶の中を漂白していた様な気もするが、雲が架かったように思い出せない……。

それはそれとして、寝落ちしてから何時間経ったのだろうか？ 周りの音に聞き耳を立てるも、娘たちのはしやく声もなく、湖畔は静寂に包まれていた。

そして、誰かがブランケットを掛けてくれたらしい。情けない事に彼女らに気を遣わさせてしまった様だ。

周囲は月光が優しく降り注ぎ、辺りを淡く照らしていた。

本栖湖の方に目をやれば、鏡の様に磨き上げられた湖面には数多の星々が映り込み、それらに彩られた富士が聳えていた。

恭介は眼前に広がる景色を、今すぐにも撫子に見せてやりたいと思った。だが、そ

れは真に詮無い事だと大きく嘆息する事となる。

既にこの世を去った者にどうやって同じ景色を見せようか？それは、不可能と言うものだと。

故にまた大きく嘆息する。詮無き事だと解っているのに、タラレバを考えてしまうのは彼女こそが自分の軸だったからだ。

……解つてはいるんだ。しかし、それは頭の理解だ。心の理解ではない。しかし、自分はこの泥濘から抜け出す術を知らない。

アイツが居るなら何だって良い。アイツの為ならどんな事だってやってやろう……

しかし、今はどうだ？撫子という太陽を喪い、迷走しているじゃないかと……それで、生きていくしか無いのだ。遥かに永い余命を……

……また思考が宜しくない方向に向かつてるな……

故に恭介は深く嘆息した。詮無いなど。

「起きてるの？」

不意に声を掛けられた恭介はビクリとする。

しかし、声の主が美波であると気が付いた彼は、警戒心を解いた。

「……酔いは醒めたか？」

「ええ。醒めてしまいました」

美波は困った様に微笑んだ。

「……酒は程々にしいさんせえや。飲める内が華と言うが、それ続けて飲めんくなっても、わしや知らんど……」

酒を無理やり飲まされたが故の恨み言。

「よく言われます……」

美波は困った様に笑い、恭介は大きく嘆息した。

「ところで國守君……」

「何や？」

恭介はぶつきらぼうに返事をする。

「その左眼はどうしたの？」

恭介は、ああそんな事かと嘆息。

「……三年前、焚き火眺めながら酒飲んで寝てたらな。ガス缶を火に放り込みやがった糞餓鬼が居て、爆発した時の破片でこのザマじゃ」

「酷い……」

「全くじゃ……」

「片眼じゃ距離感掴めないと言うけど、大丈夫なの？」

「流石に慣れたよ」

「そうなんだ……」

美波は少し悲しげな表情を浮かべた。

「そう言えば、撫子ちゃんは元気にしてるの？」

「……」

恭介は黙りこくる。その表情は黒一色。

「アイツは三年前……事故で死んだよ……単独のバイク事故じゃった……」

「そんな?！」

美波は恭介の思ってもない言葉に絶句した。酷い冗談の様に思いたかった。しかし、恭介の声のトーンやその漆黒の表情が、雄弁に事実だと告げていた。

「そんな……」

「儂も悪い夢か何かと思いたかった……じゃけど、現実じゃ……」

△▼△▼△▼△▼△▼

それは左眼を潰されてから、まだ十日目の事だった。

俺はまだ入院していた。酷く退屈だったが、夕方になると撫子の奴が顔を見に来てくれる。それが細やかな楽しみだった。

その日の夕方は、病棟の端の方にあるベランダで、夕日を眺めていた。すると遠くの方から「パーン……」と破裂音の様な音が呟した。

その時はなんの音だったのか、気にも留めなかった。

が、次第にパトカーや救急車のサイレンの音が聞こえ始めて、交通事故か何かだなあとぼんやり思っていた。

暫くして、救急車は病院の建つ山を登ってきた。

それから三十分が経ち、夕食の時間になってしまったので、病室に戻って飯を食べながらに、えらくアイツ遅いなあと思っていた。アイツなら、残業なら残業と連絡跨越す筈なのだが……。

それから程なくして、アイツの親父から電話が掛かってきた。

「……恭介君、落ち着いて聞いてくれるか？」

その、深刻そうな声色になんだか酷く悪寒が走った。

「撫子が……死んだ……今、県中県立中央病院の霊安室に居る……」

一体何を言われたのか、直ぐには理解できずに復唱を求めた。

「撫子が死んじまったんだよ……!」

スマホを捨て置き、病室を飛び出した。嘘だ!嘘だ!と心の中で叫び、階段を転がり落ちながら下へ駆け地下にあるその部屋へ。そして霊安室の扉に手を掛け飛び込んだ先に友は居た。

冷たく硬いステンレス製の台の上に置かれた亡骸は酷く損傷しており、頭部に至って

は完全に潰れてしまっていた。故に顔での判別は不能であった。

しかし、その背丈や持ち物が恭介に現実を突き付けた。

アルミ鑄造の猫のストラップに、手慰みに拵えた銀の指輪……全て彼女に与えた物だった。俺はその現実には呆然と立ち尽くすしかなかった。

△▼△△▼△▼△▼△▼

「……」

美波の頬を涙を伝う。あの日以降も連絡を取り合う仲だった友の最期が余りに酷く哀しくて。

「今年のお盆、拝みに行っても良いかな……？」

「良いとも、アイツも喜ぶ」

「ありがとう……」

「さあ、今日はもう遅いし、寝えさんせ。俺ももうじき寝るけえ」

「そうだね……じゃあ恭介君、おやすみなさい」

「おやすみ」

美波が去り、一人残された恭介はパイプでも燻らすかと自身も席を立った。

恭介はキャンプサイトから離れて展望公園へ赴き、懐からパイプを取り出すと、ボウ

ルにタバコ葉を詰め、オイルライターで火を灯した。パイプからはプカプカと煙が登り、チヨコレートの様な甘く香ばしい香りが周囲に漂った。

「はあ……」

恭介は紫煙を吐き出しながらに天を仰いだ。

見上げる先には燦々と輝く満月が在った。

どんなに手を伸ばしても手が届くことがないそれは、丸で死んでしまった友の様であつた。愛おしくて、哀しくて、届かなくて……

底無しの孤独感、恭介の心を確かに蝕んでいく……

しかし、恭介はその絶望に寛容的だつた。何故なら端からこの世に期待も何もしてないからだ。

恭介は己の事を呟いながらに呪うしかなかつた。

△▼△▼△▼△▼△▼

尿意で目覚めたなでしこは、林の中をガスランタンを携えビクビクと歩んでいた。その彼女は暗い所が大の苦手なのだ。

パキツ。枯れ枝を踏む。カサツ。落ち葉を踏む。ガサツ。鼯か何か走る。

その度になでしこは「ヒィッ」等と悲鳴を上げ怖がつた。

林を抜けたなでしこは、月明かりと街灯の明かりに胸を撫で下ろした。あー怖かつた

と。

怖いものがなくなったなでしこは、いつもより少し早い足取りでトイレへと向かった。

用を済ませホツとしたなでしこは、せつかくここまで来たのだしと、展望公園の方まで足を伸ばす。

すると公園の方から、甘い匂いが微かに漂ってきた。

「チヨコレートみたいないな匂いだ……でもちよつと違うような……う」

なでしこは鼻を高くして、匂いを嗅ぎながらに匂いの元へと接近する。

すると、道路のカーブした所にある手摺りの部分に人の影が佇んでいた。

一瞬幽霊かと思つてビックリして、ランタンを取り落しかけた。

が、よく見ると両足もあるし影もあるしで幽霊の類いではない様だった。

ガスランタンの灯りを消して、そーとそーと近付いて観察する。すると、その人はタバコ？を吸っていた。

「恭介さんだ……」

なでしこはそれが恭介であることに気がついたが、声を掛けるべきか躊躇する。

何故なら、その背格好はとても哀しそうだったから。

なので物陰に身を隠して暫く観察してみることにするが。

「……別に取って喰ったりはせんけえ、出て来いさんせーや」
上手く隠れていたつもりだったが、バレてしまった。

「バレちゃいました……」

なでしこはてへへと笑って誤魔化す。

「……眠れんから出てきたんか？」

「いえ、トイレで目が覚めちゃって……」

「そうか……」

恭介はそれ以上聞かず、本栖湖の向こうに聳える富士の方へと向き直った。

「月も富士山も綺麗ですね！」

「嗚呼」

「あー！」

「なんね？」

「実はここから見える富士山は千円札にもなってるんですよ！」

「ほう、それは知らなかったな」

恭介は千円札を取り出すと、今見えてる景色と見比べた。

「うむ………本当だな」

「でしよ！でしよ！」

なでしこは嬉しそうに笑う。

「それと、ここがわたしがキャンプ始める切っ掛けになったとこなんですよ！」

「ここが？」

「はい！でも、本当は千円札にもなってる富士山見に来ただけのはずだったんですけどね……」

なでしこはここまで自転車で来たのは良いけど、富士山見えなくて疲れたしとトイレのベンチで寝てしまつて、気が付いたら真つ暗になつてたと恭介に話した。

「それでね。真つ暗で怖かつたし、スマホも忘れちゃつてお姉ちゃん呼ぼうにも呼べなくて……そしたらね。たまたまその日にキャンプしにきていたリンちゃんに出逢つて、焚き火に当たらせてくれたし、カレー麺も恵んでくれて、富士山も見れて。わたしすつごく楽しかつたんだ！キャンプつてこんなに楽しいんだって！」

彼女に初めて会つた日もそんな話をしてたなと思うも、それは野暮つて物だとして大人しく聴いていた。

「それは良い経験だったな」

「わたしもそう思います！それと恭介さんの切っ掛けも聞きたいです！」
なでしこは満面の笑みを恭介に向ける。

恭介はそう言えば、己の馴れ初めは話した事なかつたなあとぼんやり思った。それ故に

お返しに話す事にする。

「儂か？儂ん場合は……小五の秋口だったかに、親友にボーイスカウトと一緒になんか？と誘われたんが全ての始まりじゃったな……」

なでしこは相槌を打って話を促す。

「儂は元より集団に属するのを嫌う質だな。付いていくつもりはなかったんだが……アイツは何処か危なかしくて、一人にするのもどうかと思つて、ついていくことにした。でだ、体験入隊の時がそうだったんだが、お互い気が付いたら、妙にその団に馴染んでしまつてた」

「心の居場所を見つけたんですねい」

「まあ、教わる立場から教える立場になつても、まだそこに居るのだから。そうに違くないな」

「恭介さんは立派な人だなあ」

「立派なんは儂じゃのうて、親友の方じゃ……アイツがいなけりや、本当にただの木偶坊に成り下がつてたじゃろうしな……」

「……恭介さんのご親友ってどんな方だったんですか？」

「天真爛漫で、何かと世話焼きで、おつちよこちよいで……小もうて可愛い女子おなごじやつたよ」

恭介は胸ポケットに忍ばせていた免許証入れから、一葉の写真を取り出した。その写真には紋付き袴の出で立ちで太刀を佩用する恭介と、色鮮やかな振り袖を着た小柄な女性が写っていた。

なでしこは成人式の前撮りであろうと解る写真に釘付けになっていた。丸で幸せその物を切り出した様なそれを。寂しさの欠片なく、心の底から笑っていた頃の恭介の表情を。天真爛漫に彼に微笑みかける小柄で綺麗な女性の表情を。ただただじつと眺めていた。

「綺麗で可愛い人ですね」

「はは、そうじゃろ。儂唯一の、自慢の友じゃったしな」

恭介は懐かし気に微笑する。それと同時に何処か哀しげであった。

「今はどうされてるんですか？」

恭介は深く嘆息して告げた。

「もう、この世には居らん……三年前に事故で死んじまった。バイクの単独事故じゃった」

「な、亡くなっちゃたんですか……」

なでしこは思い出した。昼間に彼がボソリと零した「儂に生きとる友が居ればな」という言葉を。

「ああ。アイツ在ってこそこの儂じゃったから、途方に暮れたよ……まあ、今でも途方に暮れとるかと言え、真じやけどのう」

なでしこは恭介に掛けるべき言葉が見当たらなかつた。唯一無二の友を喪つたことが無いから。故に彼の哀しみを完全に理解する事はできないし、下手な同情は逆撫でする事に等しいと。

「まあ、それでも生きれる所まで行かねばならんがの」

「生きれる所まで？」

「ああ。自害は友への背信じゃからな。じゃからこの余生を有意義に使いたい……」

なでしこは恭介の言う『余生』という言葉が引つ掛かつた。大病を患つてて時間ももう限られてるならまだしも、彼は至つて健康に見えるし……と、小首を傾げた。

「なんね？」

「恭介さんの言う『余生』ってどんななのかなって……」

「……儂の言う余生はこれから八十年位はあろうかと言う、寿命の事じゃ。何せ、儂の爺様は百迄生きたけえのう」

「百歳?!」

「そうじゃ」

「そうなんだ……あ、それと！」

「何ね」

「その余生つて……お独りで生きられるから、余生つてことですか……?」

なでしこは余りに攻めた質問だったかな?と反芻し少し後悔する。しかし、もう口頭で訊ねてしまった今の言葉はもう取り消せない。

恭介は紫煙を深く吸い込んで、風に漂わせる様にゆっくり吐き出すと「そのつもりじゃ」と静かに答えた。

なでしこは悪い事を訊いてしまったと悪怯れる。

しかし、恭介はなでしこの頭に左手を置くと「別に怒りはせんし、恨みもせんよ」と呟いた。それに「事実じゃしな」と付け加えて。

なでしこは恭介の人生観が余りに寂しすぎると感じたと同時に、放っておいちや駄目だと直感する。

なでしこは自身の頭の上に置かれた恭介の左手を手を取って降ろさせると、彼の手を自身の胸に両手で抱き込んだ。

なでしこの大胆な行動に恭介は「なにを?!」と目を丸く見開き激しく動揺する。彼女の心臓は力強く鼓動して、その秘めたる熱意を伝搬せんとする。

なでしこは恭介の顔を見上げて微笑む。

「恭介さん。わたしはもう貴方のお友達です。だからもう独りじゃないですよ」

なでしこの宣言に恭介は胸を打たれる。自身が要塞化までして閉ざして来た心の城門を破城鎚で抜かれた様な衝撃だった。

「わ、儂が君の友人でええんか？」

「もちろんですよ！」

なでしこは屈託のない満面の笑みで答えた。

恭介は天を仰ぎ、一つ己の行いを改めると誓った。

真の友一人だけが唯一の友ではない。それは勝手に設けた自己制約だ。友が増えた所で己が嘗ての友の事を忘れなければいいだけじゃないか？ そうだろう。恭介よと。

恭介は自身の中の壁が氷解して行くのを感じていた。何故こんなに難しく考えてたんだと。増えつつあっていいじゃないかと。

「ははは……そうじゃな。わしや飛んだ思い違いをしちよつたな」

恭介はなでしこの手に右手を重ねる。

「儂の新たな友人なでしこよ。ありがとう。お陰で気が楽になったよ」

「これからも宜しくお願いしますね恭介さん！あと、やっと心の底から笑ってくれましたね！」

「そ、そうか？」

「ええ。とつても優しい笑顔ですよ！」

「フ、そうか」

えへへ、はははと湖畔に二人の声が弔する。

そして、恭介は左手に鼓動以外の感触を覚え始めた。それはとても柔らかくマシヨマ
口の様な……

「な、なでしこよ」

「何でしようか？」

「そろそろ、左手を離して欲しい……」

「左手？あ……」

なでしこは丸で茹で蛸のように真っ赤に頬を染め、慌てて恭介の左手を開放した。

思えば恭介は異性だったとなでしこは失念していた。そして、胸に残ったゴツゴツと
した男性らしい手を抱いていたというのもまた、羞恥心を加速させる。

一方で、開放された恭介は自身の心拍数が確かに上昇するのを感じていた。そしてま
だ指に残った柔らかな感触が、触ってしまったという背徳感に繋がり、心拍数に加速を
掛けた。

「す、すまん！」「ご、ごめんなさい！」

お互いぱつと離れて顔を背け、それぞれが羞恥と背徳で悶絶。

暫くの沈黙の後、最初に笑い出したのはなでしこだった。恭介もそれに釣られて笑い

だし、お互い一通り笑い終えた頃には羞恥や背徳なんてどうでも良くなっていた。そして、お互いの言葉で改めて謝罪した。

「何だか気が楽になったよ。ありがとう」

「どういたしまして」

「……それにしても、随分と大胆な手段を講じてくれたな？ お陰で目が醒めたというのもあるが……」

「えへへへ……ああしたら恭介さんの心に直接呼び掛けられるのかと思ひまして……」

「……君は凄いな」

「そんな、またまた〜」

なでしこは嬉しそうに手をブンブン振る。

「ぐうぐうるる〜」

なでしこはハツとした表情で腹を押さえると「お腹空いちやいました……」と困った様に微笑んだ。

「……あ」

恭介は自身が本来晩飯とする筈だったうどんの存在を思い出す。

「僕の晩飯に使う予定じゃったうどんがあるんじゃ……」

「良いんですか？」

恭介の提案に、なでしこはその青き双眸を輝かせて期待を膨らめます。

「とは言え、素うどんじゃけどええか？」

「大歓迎です！」

「よっしゃ。じゃあ、戻ろうか」

「はい！」

恭介はパイプを手にしていた事を思い出すが、既に火は消えてしまっていた。しかし、また今度でいいやと思えていた。

「帰り道は君が照らしてくれるんじやろ？」

「もちろんです！任せてください！」

なでしこはガスランタンにマッチで火を灯した。そしてそれを両手で抱きかかえ、と、軽やかなステップで恭介の前へと歩み出す。

恭介はそんな彼女の背中を追いかける。華奢で小さなその背中を。新たな道標となつてくれたその背中を。

夜更かし

夜の帳が降りた静かな湖畔の畔にて二人の男女が揺らぐ優しげな火を囲む。

男こと恭介はコッヘルをガスストーブで炙り、少女ことなでしこは楽しげな眼差しでそんな彼の動きを眺めていた。

「恭介さん」

「なんね?」

恭介は手を止め優しげな色をした右目をなでしこに向ける。

「恭介さんって、おうどん好きなんですか?」

「ああ。安い旨い高効率の三拍子が揃うとるけえな」

なでしこは恭介の言う高効率の意味が解らなくて、小首を傾げた。

「湯さえ沸かしてぶち込めば、食えるようになるし。味付けは麺つゆさえ有ればそのまま釜揚げとして食えるしのう」

確かにそうだなでしこは頷く。

「あと、素うどんじゃっても毎日毎食食つても嫌にならないのが良いところじゃな」
そんな恭介の発言から、なでしこは恭介の食生活の偏りを感じ取る。まさか、普段は

素うどんばかりで、栄養が偏ってるんじゃないかと。

「まさか、毎日毎食素うどんじゃないですよね？」

なでしこは本気で恭介の身を心配した。いつか倒れてしまうと。

「まあ流石に毎日じゃあないけど、最近はな……」

恭介は苦笑いを浮かべつつ、どこか遠くを眺めていた。その実彼は親友の撫子亡き後、食生活が荒んで栄養失調になって倒れた事がある。故に碌でもない結果になる事は既に学んでいた。

しかし、ウドンスキー・ススロノフ（誰？）は止められない。

「それなら良いんですけど……」

「……これでも善処はしてる。好きなものは止められないだけじゃ……」

「ちゃんとお野菜もお肉も食べてくださいね」

「わかってる……」

そんなしようなもない会話をしていたら湯が湧いたのか、グツグツカタカタとコツヘルが知らせてくれていた。

「お、湧いたな」

恭介はコツヘルに買ってから時間が経ってしまったて、ほぼ解凍状態になってる冷凍うどんを入れて湯掻いてゆく。

暫くして、十分うどんに火が通った頃合いだと恭介は火を止めると、出汁の元を目分量で適量に入れ、この辺りの人間であるなでしこは見たことがない様な、ローカルなラベルの醤油をこれまた目分量で適量に注ぐ。

なでしこはやっぱ恭介さんは目分量の人なんだなあと思うものの、目の前で出来上がりつつあるおうどんが美味しそうだなあと垂涎する。

「もうすぐじゃ」

「えへへ」

そして、出汁と醤油の優しい香りがあるそれが完成する。

出汁の元と醤油で作った汁以外には、冷凍うどんしか入っていないシンプルを極めしそれが遂になでしこに手渡される。

「優しい香りがしますねい」

「そうかい」

「とてもいい香りですよ」

「わかった、わかった。じゃあ、ゆっくり食べさせ」

「では、頂きます！」

なでしこは箸でうどんを掬い上げ、口いっぱい頬張った。口の中のうどんは冷凍の讃岐うどんらしく弾力に富んでいて、もちもちとした食感がとても楽しい。そして、汁

も優しく控え目な塩加減と鼻孔をくすぐる素朴な風味が合わさって、とても美味しかった。

ただ、熱々なうどんを口いっぱい頬張ったものだから、舌尖を火傷してしまった。

「くひのなはやへとひたー」

「誰も盗りやせんけえ、落ち着いて食べさせ。それに、まだあるけえ」

恭介はそう言いながらも一つのコッヘルを火に掛けて、湯を沸かそうとしていた。

確かに彼の手元にはあと四玉もある。だが、なでしこにとってはその程度を平らげるなど造作もないのだ。何故なら彼女は某ピンクボールの化身だ。

恭介はうんうんと、かわいいい唸り声を上げながら、もちやもちや楽しそうに美味しそうに食べるなでしこの姿を優しげな眼差しで眺めていた。何故ならそんな彼女の様子を眺めるのが楽しいと思えているからだ。それに、不思議と心が洗われる気がする。

「旨いか？」

「美味しいです！」

「そりゃあ良かった」

恭介はそれなりの笑みを浮かべつつ茹で上がったうどんをなでしこの抱えるコッヘルに追加する。

なでしこはふと思う。

「なんだか、わんこそばみたいで楽しいですね！」

「まあ、確かにそれっぽいな」

「でしょ！でしょ！」

恭介となでしこは互いに笑いあった。

「そう言えば、恭介さんは食べなくて良いんですか？」

「わしゃええよ。既に君らがふるもうてくれた、おごつそで腹一杯じゃー」

なでしこは彼の口からまた知らない言葉が出てきたと小首を傾いだ。

「おごつそつて何でしょうか？」

恭介はこれも方言だったかと苦笑いを浮かべる。

「おごつそちゆうのは、ご馳走ちゆう意味じゃ。流石に何でこう言うんかは知らんがのう」

「なるほど……おごつそはそういう意味なんですわい。ちよつとかわいい言葉カモ……」

「かわいい……か？」

「ちよつとだけ」

そしてまた互いにハハハと笑みが咲く。

そしてなでしこは思う。おうどん好きな恭介さんは、ほうとうも好きそうだなと。

それにお父さんが「どんな青年か会ってみたいものだな」と言つてたなあ。

「恭介さん」

「なんね？」

「恭介さんつて、ほうとう食べた事ありますか？」

「ほうとう……確かうどんのような山梨の郷土料理だったか？」

「そうです！」

「そういや、まだ食つた事ねえなあ……」

なでしこはふふふと悪戯を思いついた子供の様な笑みを浮かべる。ほうとうアタツクを食らわす相手を見つけてしまったからだ。

「な、何じゃ？」

「恭介さん、もし良ければ、今度家に来ませんかっ！」

「?!」

なでしこの唐突な提案に、恭介は目を白黒させて激しく動揺する。何故なら、仮にも嫁入り前の娘の家に上がり込むなど、倫理的に駄目だろうと解しているからだ。

しかしなでしこはそういった危機感的なものがないのか、恭介の反応にキョトンとする。嫌なの？と。

「駄目ですか？」

なでしこは上目遣いで恭介を見上げる。それを受けた恭介は胸が痛む感覚を覚えた。しかし、彼は今首肯する訳にはいかなかった。倫理観との板挟みな故に。

しかしなでしこは気が付いた。別に恭介は嫌そうにしている訳ではないと。しかし、何故?と。

「流石にうら若き娘の家に上がり込むのは、そのだな……」

「あー……」

なでしこは理解した。恭介が心配しているのは倫理観の問題だと。そこで彼女は切り札を出すことにする。これなら彼は納得してくれるだろうと。

「そのですね恭介さん。実はわたしのお父さんが恭介さんに会ってみたいと言っていたんですよ〜」

「……」

恭介はすぐには返事を返さず、なでしこの双眸を観察する。が、彼女の目が泳ぐ様子もなく、本当の事だと確信を得る。

「農に会いたいねえ……」

恭介は何処か遠くの空を仰いだ。

とはいえ、敵対的なそれとは違う友好的な意味合いのそれである事は想像がつく。

よつて、そこまで辛苦する必要はないだろうと、心の中で自らに語り掛けた。

ただ、色々と根掘り葉掘り訊かれるかも知なあと、幾ばくかの不安を禁じ得なかつた。「なして、儂に会いたいと思ううちよつてんじやろうな？」

なでしこは額に右手の人差し指を当てながらに、うぐんと唸る。

しかし、どんなに考えても答えに行き着かなかつたのか、何ででしょうねえ……と困つたように笑う。

「まあ良いか。君の御父上が儂に会いたいと仰られるのであらば、お会いすると致しますよう」

なでしこはぱつと笑顔を咲かせると、来てくれるんですね！と恭介の腕にしがみついた。

恭介は満更でもない様子である。

「まあ、何時にするかはそちらで決めてくれ。わしやそれにあわせるけえ」

「はい！決まったら連絡しますね！」

さて話は決まつてしまつたが、空手で参るのは無礼極まりないだろうな……。無難に土産で酒と菓子でも持つて行くか……と、恭介はぼんやり考へいた。

「……所で、ご両親は日本酒は嗜まれるかね？」

「はい！お父さんにお母さんにお姉ちゃんも、みんなお酒は大好きですねい」

「そりやあ良かった……」

宜しい……ならば『アレ』を用意していこう……これならさぞ喜ばれる事だろう……
フフフフ……。

恭介は悪戯を計画する子供のように微笑した。

「ところでなでしこよ」

「なんでしようか？」

恭介はきよとんとしたなでしこの澄み切った水色の双眸を見つめて一言。「ありがとうな」と呟いた。

なでしこはふえ？と声を零し目を見開く。

「いえいえ！恭介さんに感謝しないといけないのはわたしの方で……鉈も貰っちゃったし、炊飯のやり方も教えてもらいましたし、それにおうどんだって頂いて……」

「いやなあ。儂は君に会えた事で救われたけえ、その感謝じゃ」

そして恭介は優しげに微笑む。

「救われた？」

「ああ。……儂はな、アイツが死んでからこの世の全てに絶望しとつた。じゃけど君に出逢えて、この世もまだ意外と棄てたものじゃないかも知れんと思えるようになってきたんじゃ」

なでしこは恭介の手を両手で包み込む。

「恭介さん。わたしだって恭介さんには感謝してもしきれませんよ。最初に出逢ったとき助けて貰ったときとても嬉しかったですし、それにとっても楽しくて……今日だつてまさかここで再会できるなんて夢にも思わなくて、それに、色々と教えてもらつたり、鉈を頂いたり……わたしも恭介さんには感謝してもしきれません」

「そうかい？」

「はい！」

なでしこは恭介の右眼の瞳をまっすぐな眼差しで見つめ返す。

恭介は思う。お互い様つてやつかなと。

「儂は君に逢えてよかったよ……ありがとう」

「こちらこそ恭介さんに出逢えて良かったです！」

なでしこは柔らかなその手で、恭介の手を強く握り締めた。

その刹那、宇宙に一筋の閃光が迸った。

「あっ！」

その光の軌跡は闇を切り裂く光の剣のようであった。

「びつくりした」

「ああ。見事な流れ星じゃったな」

「ですね！とつてもきれいでしたね！」

「そうじゃな」

恭介となでしこはお互いの顔を見合い微笑んだ。

「まだ食うか？」

「残りもわたしが食べて良いなら、全部欲しいです！」

恭介はそうかそうかと微笑むと次の玉をなでしこのコッヘルへと移した。

なでしこは楽しそうに、美味しそうにそれを食べていく。

そんななでしこの仕草が愛らしくて。恭介としては珍しく、心から穏やかな表情で微笑んでいた。

「ありがとうな」

「はい！こちらこそ！」

湖畔の夜更けに燦然と輝く星々の帳の下、二人の男女が笑い声が飴していた。